

石川県金沢市

金沢城 惣構跡Ⅳ

～金沢城下町遺跡(西外惣構跡升形地点)発掘調査報告書～
－遺構編－

平成24年3月
(2012年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

石川県金沢市

金沢城 惣構跡Ⅳ

～金沢城下町遺跡(西外惣構跡升形地点)発掘調査報告書～
－遺構編－



平成24年3月
(2012年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

例 言

1. 本書は、石川県金沢市本町1丁目地内に所在する金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）の発掘調査報告書の遺構編である。
2. 西外惣構跡升形地点は、金沢市都市政策局歴史建造物整備課による「惣構堀復元整備事業」に伴い、平成20～22年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査の期間と場所、面積は次のとおりである。

平成20年7月28日～同年8月8日（試掘坑約40㎡）、平成21年5月27日～同年7月17日（西側約190㎡）、平成22年3月4日～同年3月12日（北東・南東側約190㎡）
4. 発掘調査は、金沢市埋蔵文化財調査委員会（委員長 橋本澄夫氏、委員 谷内尾晋司氏、垣田修児氏、横山方子氏）の指導の下で、平成20年度は谷口宗治（文化財保護課主査）、平成21・22年度は庄田知充（文化財保護課主任主事）が担当した。
5. 発掘調査作業は、金沢市シルバー人材センターに業務委託して実施した。
6. 基準点測量・水準測量・グリッド設定および遺構実測は日本海航測株式会社に委託した。
7. 本書の編集・執筆・写真撮影は、庄田知充が執筆・編集した。絵図写真については、各所蔵元から資料提供を受けた。
8. 本書に収録した遺物は、全て金沢市教育委員会が一括保管している。
9. 本発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の機関・個人からご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を申し上げる（50音順・敬称略）。

清水敦子、富国生命保険相互会社
松本市教育委員会、「歴史的用水・堀」調査研究会各位
10. 屋内整理および製図は、次の方々に協力していただいた（50音順・敬称略）。

井川明子、蟹ヤエ子、車谷律子、関屋裕美、谷森真利、寺西悦子、土橋裕美、
供田奈津子、畑尾ゆか、法桑加代、増山智子、松原良子、門谷藤代、米田夕美子
11. 本書の各図及び写真図版の指示は以下の通りである。
 - (1) 方位は全て座標北である。座標は国土座標第Ⅶ系（測地成果2000）に準拠し、真北からは1分、磁北からは7度21分東偏する。
 - (2) 各図の縮尺については原則としてスケールを付し、表題末にも示している。
 - (3) 遺構図の水平基準は海拔高で、単位はメートル（m）で記した。
 - (4) 惣構に関する遺構は、土居、堀、堀石積などと標記し、その他の遺構名は、SK：土坑、SD：溝、SP：小穴・柱穴、SA：石列・石積、SE：井戸、SX：大形土坑・その他の遺構などの略号を用いた。
 - (5) 惣構の各部位名称及び計測位置については、別途凡例に詳細を記載した。

目 次

金沢城惣構跡と関連調査の位置

第1章 惣構の位置と歴史的環境	1
第2章 西外惣構跡升形地点の発掘調査	2
第1節 既往の惣構調査と復元整備	2
第2節 位置と周辺環境	2
第3節 調査地周辺の城下絵図	2
第4節 調査の経緯・概要	2
第5節 遺構	5
第3章 総括	24

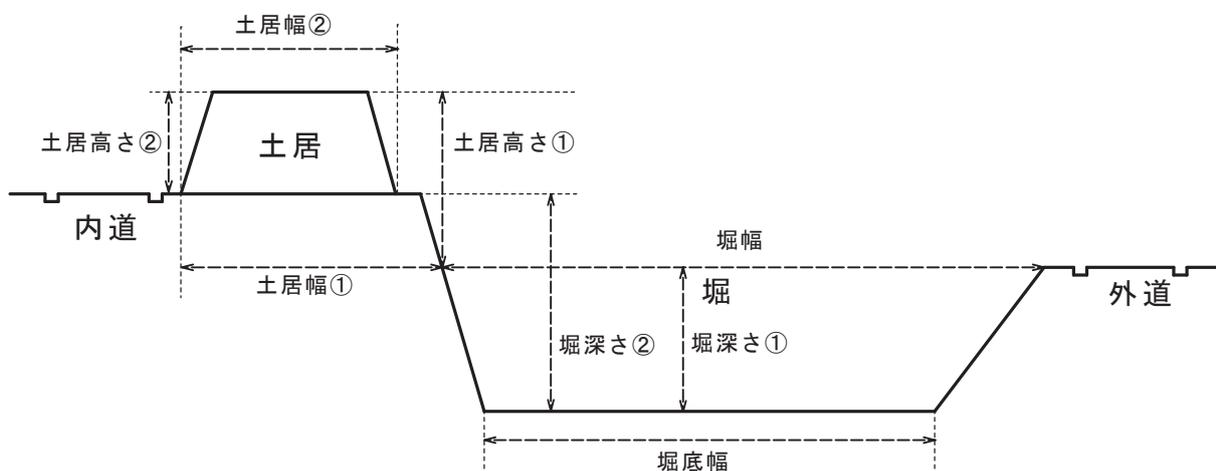
西外惣構跡升形地点関連史料

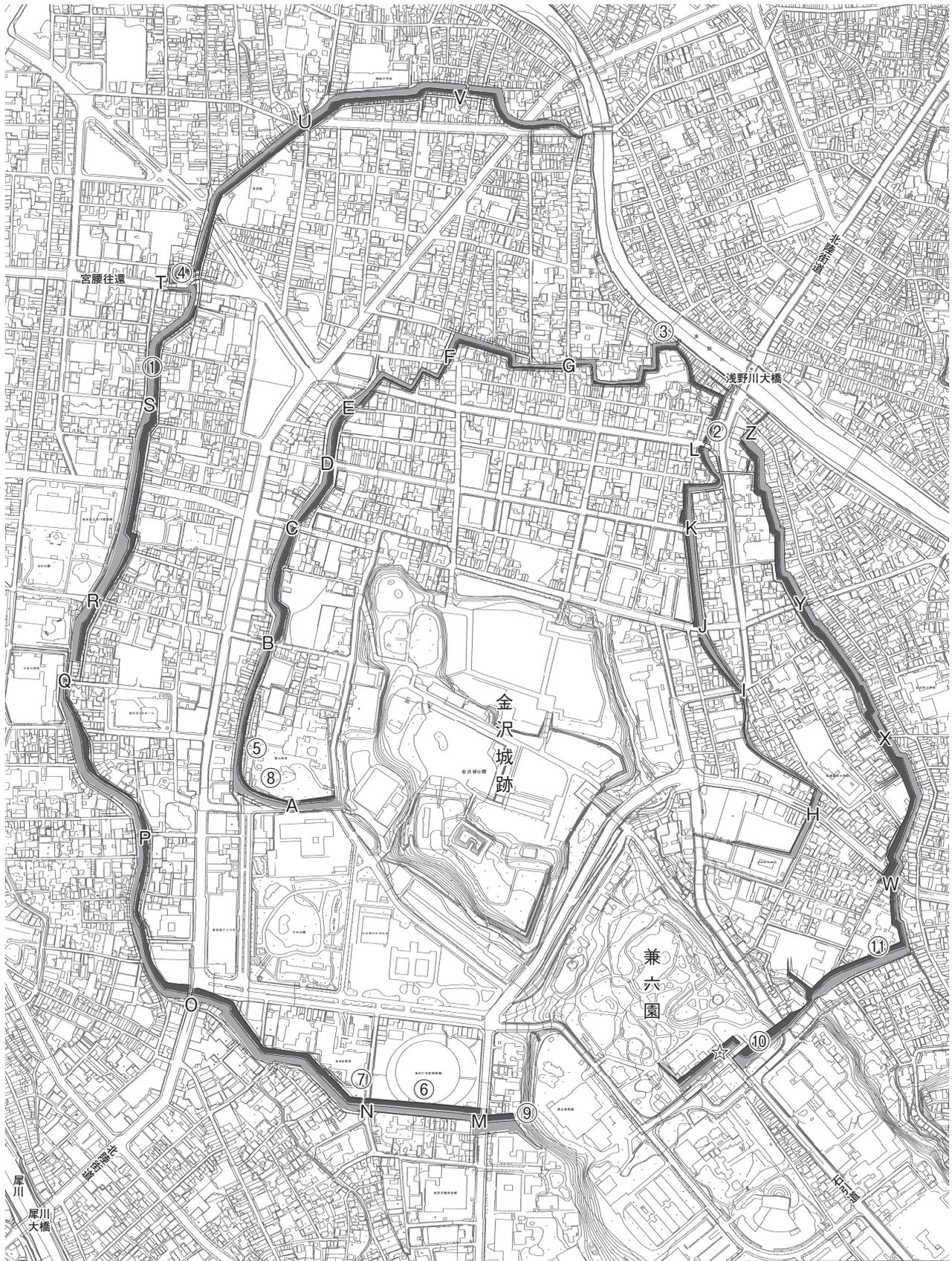
報告書抄録

写真図版

凡 例

惣構の規模等を示す名称は以下のように記した。





- ①外惣構跡 (武蔵町地点) ②東内惣構跡 (枯木橋北地点) ③西内惣構跡 (主計町地点) ④西外惣構跡 (升形地点)
 ⑤西内惣構跡 (尾山神社西地点) ⑥広坂遺跡 (土居・内道)・金沢21世紀美術館南側水路 (堀) ⑦宮内橋詰遺構 (土居・堀)
 ⑧尾山神社南側 (土居) ⑨西外惣構跡 (本多町3丁目地点) ⑩兼六園 山崎山 (土居・堀) ⑪常福寺裏 (土居・堀)
 A*金谷外柵御門前土橋 B*不明御門前橋 C西町橋 D十間町橋 E近江町橋 F袋町橋 G新町橋 H* (奥村内膳殿) 後惣構土橋
 I九人橋 J藏人橋 K稻荷橋 L枯木橋 M豊屋橋 N宮内橋 O香林坊橋 P右衛門橋 Q*村井又兵衛殿前橋 R*長又三郎殿前土橋
 S図書橋 T升形橋 U東末寺橋 V塩屋町土橋 W剣崎辻橋 X備中橋 W下材木町橋 Z小鳥屋町橋 @小立野虎口 (仮称)
 註：A～Zは橋名で、*を付さない橋は『金沢城構絵図』(文化八年・1811年)、*を付した橋は『道橋帳写』(文政七年・1824年)による

金沢城惣構跡と関連調査の位置 (S = 1 / 10,000)

第1章 惣構の位置と歴史的環境

石川県は日本海に面した南北に細長い県で、東は富山県、西は福井県、南は岐阜県と接している。旧国名では、北の能登国と南の加賀国からなる。

金沢市は、旧加賀国の北部で石川県のほぼ中央やや南に位置し、その中心地区は南東の山間部から伸びた小立野台地の麓にある。南東には奈良岳・奥三方・大門山など海拔1500mを超える山地が構えており、この山地に源を發して台地を挟むように南の犀川および北の浅野川が西流し、両河川に面した台地裾部は河岸段丘を形成している。日本海に面しては砂丘を背景とした海岸線が延び、犀川河口には金沢城下の外港の役割を担った宮腰湊（現金石港）、浅野川河口の河北潟に続く大野川には大野湊があった。宮腰湊から城下へは、元和2年（1616）に築造された直線道路の宮腰往還のほか木曳川が通じ、犀川・浅野川と共に陸・水運を担っていた。

加賀藩は、加賀・能登・越中三国の大半を領地とした藩で、藩主は前田利家を藩祖とする前田家が世襲し、金沢城を拠点としていた。金沢城は、一向衆の拠り所であった金沢御堂旧地に築かれた織豊城郭を起源とし、舌状にのびる小立野台地先端部の崖を利用しており、城下外郭の東西は、前述の二大河川により区切られている。金沢の惣構は、城を中心としてこの河川の内側を内・外二重に巡っており、それぞれが小立野台地を挟んで東西2流に分かれている。惣構の立地位置は、両河川に向かって階段状に低下する河岸段丘崖部にあたり、その高低差を利用して崖下に堀、崖上に土居を築いている。

測量に基づく城下町絵図は、寛文7年（1667）以降が知られ、多くの絵図に惣構が堀と土居として色を変えて表現されている。土居の盛土はほとんどが現存しないが、堀の一部は幅が狭まっているものの水路として残る箇所が多く、堀の線形を推定することが出来る。また、水路に隣接する土地の区画形状や、惣構内外に沿う道から、現在の地図上に土居と堀の範囲を比定することが可能となっている。

東内惣構は小立野台地東側裾部の小將町中学校敷地内を起点として始まり、尾張町1丁目の枯木橋で旧北国街道と交差したのち浅野川へ至る。延長約1.2km。東外惣構は小立野台地上に立地する兼六園の南東辺を起点とし、浅野川大橋東側で浅野川に至る。延長約1.6km。西内惣構は金沢城金谷出丸跡である尾山神社南辺を起点し、袋町橋で旧北国街道と交差、主計町緑水苑で浅野川に至る。延長約1.7km。西外惣構は本多町3丁目の丘陵裾部を起点し、香林坊橋で旧北国街道と、本町1丁目の升形で旧宮腰往還と交差、堀終端部は浅野川に接続しない。延長約3.2km。

内惣構は慶長4年（1599）、外惣構は同15年に築造

されたとされている。内惣構が築かれた時期は、徳川政権により加賀征伐が画策された時期にあたり、二代藩主前田利長は、母芳春院を人質として江戸入りさせる一方、惣構の築造を急いだ。慶長期惣構の史料として最古のものは、慶長6年9月5日付の前田利長が発給した知行宛行状にみられる「惣構屋敷」の記述である。これにより慶長6年以前に惣構の普請が開始されていることと、（内）惣構内に相当量の村地があったことがわかる。慶長16年の『金沢屋敷割の定書』からは、惣構を境界とした町割りの整理・移動、幅2間の「土居の内道」の設置、土居に植えられた竹採取の規制が伺える。文政7年（1824）の「金沢道橋帳写」には江戸後期の惣構の構造や規模が記されており、堀幅を堀に架かる橋の渡し長、土居幅を土居内に埋められている悪水樋の長さにより求めることが出来る。

惣構の管理には町会所に惣構肝煎を置き、その配下に惣構橋番人および惣構番人を置いた。延宝8年（1680）の文献には、「道路并惣構奉行」という役職も見られる。文化9年の「御惣構等橋番人名帳」には、50人の惣構橋番人と、3人の惣構番人の名が見られる。「金沢惣構絵図」によると枯木橋・香林坊橋には柵及び木戸が設けられ、御制札および囑託札が掲げられていた。

17世紀中頃以降、惣構の戦略上役割は失われたが、藩政期を通して堀と土居を維持管理する体制は続いた。惣構が都市計画上の境界線として、また封建的身分社会の中での領域区分線として位置づけられたことと、城下町内の衛生環境を守る排水路としての役割を担っていたためと考えられる。惣構の管理に関わる禁令は、慶長16年（1611）、慶安2年（1649）、寛延2年（1749）、宝暦5年（1755）、文政3年（1820）などが出されているが、堀の水質等管理状態の悪化が問題化していたようである。発掘調査によると遅くとも17世紀末～18世紀初めには、堀が埋め狭められ始めている。

文久3年（1863年）に惣構肝煎が廃止された。明治時代に入ると封建社会の崩壊と共に惣構は無用のものとされ、各所で土居が除去されて宅地開発や新道の築造が行われることとなり、その姿が急速に失われていった。

参考文献

木越隆三 2006「金沢城下内惣構の築造時期について」『岡岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の世界史』桂書房

第2章 西外惣構跡升形地点発掘調査

第1節 既往の惣構調査と復元整備

金沢市では、平成15年度から惣構跡の史跡指定および復元整備を視野に入れて、現況調査や発掘調査、史料等の収集等を行ってきた。平成17年度には西外惣構跡（武蔵町地点）、平成18～19年度には尾張町1丁目地内の東内惣構跡（枯木橋北地点）、平成20年度には西内惣構跡（主計町地点）、平成20～22年度には本町1丁目地内の西外惣構跡（升形地点）、平成21年度には西外惣構跡（本多町3丁目地点）で発掘調査を実施し、惣構の規模・構造の解明にあたり、平成19年度には、武蔵町地点と枯木橋北地点の調査成果および史料集を『金沢城惣構跡Ⅰ』として、平成22年度には主計町地点の調査成果を『金沢城惣構跡Ⅱ』として報告した。また、本事業以外にも、平成10～12年度に広坂遺跡の緊急調査で西外惣構跡の土居および内道、平成17年度には尾山神社前で西内惣構跡の堀、平成22年度には武蔵町地内の緊急調査で西外惣構跡の堀を確認している。

これらの調査成果を受けて、平成20年12月26日には堀跡の水路、内道および虎口、残存土居等が市指定史跡「金沢城惣構跡」となった。

平成20年度には東内惣構跡（枯木橋北地点）において、堀の段階的埋め立てを示す3列の石垣と土居石垣・盛土を「東内惣構跡（枯木橋詰遺構）」として復元整備、平成21年度には西内惣構跡（主計町地点）において、素掘の堀跡を復元整備した。

第2節 位置と周辺環境

西外惣構は、金沢城南東方向の小立野台地裾部を起点とし、城の南側を東流して香林坊で北国街道と交差し、北上して宮腰往還と交差する升形に至り、本願寺金沢東別院南東角から北西に折れ、西流して浅野川に至る。

升形は、惣構が街道と交差する交通・軍事上の要衝に設けられた防御施設で、敵の侵入を防ぐために堀と土居を曲げてその内部に四角い空間をつくっている。現、本町1丁目に字名が残る「升形」は、城下町の外港へと向かう宮腰往還が西外惣構と交差する地点に設けられ、金沢城下に現存する唯一の升形遺構である。

第3節 調査地周辺の城下絵図

調査地について、城下絵図で確認できるのは、寛文7年（1667）以降である。寛文7年金沢図（大図）（石川県立図書館蔵）では、「コ」の字に屈曲して升形を形成する堀と土居、升形内を屈曲して通過する道および橋が描かれ、升形内にはすでに地子町としての町屋が表現されている。土居は、西・北堀に沿うもののほか、南堀東端突き当たりにも描かれてい

る。また、堀の外辺は外道に沿ってほぼ直線的だが、内辺は緩やかなカーブとして描かれている。寛文8年の「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）は、やや図案化された描写で描かれており、升形内部の町屋の描写は見られない。「延宝金沢図」（石川県立図書館蔵）の描写は、寛文7年図によく似ている。文政期と考えられる「金沢地図」（金沢市立玉川図書館蔵）では堀幅が狭く、線形の「コ」の字で描写され、升形内部を通過する道も橋前後で拡幅されているものの、余り屈曲することなく通過するように描かれる。文化8年（1811）の『金沢惣構絵図』（金沢市立玉川図書館蔵）には、線形で「コ」の字形の堀と北堀だけの幅の狭い土居、広見状に拡張した道路と「舛形橋」、橋外側の木戸が描かれ、升形内道路北側には升形角部から「橋番人鶴屋孫左衛門／後□（家カ）」「同 山崎屋／九兵衛」屋敷および町家、道路南側には町屋と思われる2軒分の敷地割が描かれる。また、同年の『金沢町絵図（安江木町・北六枚町・田丸町・鍛冶片原に町等絵図）』（金沢市立玉川図書館蔵）では、やや幅の広い西堀と幅の狭い北堀、西堀および北堀の角部1軒間口分の堀石垣、道幅が広がりわずかに屈折して升形を通過する道路、升形橋外側の木戸および番所の描写がみられ、升形内道路北側には升形角から2軒の「惣構」の屋敷および町屋「ニ（朱文字）○○屋○○[]」、「ニ（朱文字）脇田屋和右衛門」の表記がある。また、升形橋北東詰には共同井戸および西堀に渡された懸樋と思われる描写、升形南堀には、堀対岸の各町屋から渡された私有橋とおもわれる5本の細い橋が描写されている。『金沢町名帳』（金沢市立玉川図書館蔵）にある「御惣構等橋番人名帳」（文化9年）によると、升形橋々番人は、「銭屋并煎餅商売 山崎屋 九兵衛」と「懸ぬい職 鶴屋孫三郎後家」となっている。

第4節 調査の経緯・概要

平成20年度はじめ、本町1丁目地内に開発行為が計画された。開発行為は近隣に計画されたマンション予定地に現在居住している住民のための代替地として、当時時間貸し駐車場となっていた「升形」推定地を宅地開発するというものであった。本市では城下町金沢の世界遺産登録を目標として様々な施策を推進しているが、惣構跡は城下町における歴史遺産の中でもとくに重要な位置づけとなっており、「升形」は市内で唯一遺構が残存している可能性が高い惣構の升形推定地であったため、開発計画からの保護を検討することとなった。

まず、遺構の残存状況を確認するため、同年7月28日～8月8日に「T」字形の試掘坑（約40㎡）を掘削した（第1次調査）。結果、試掘範囲内で西・北堀

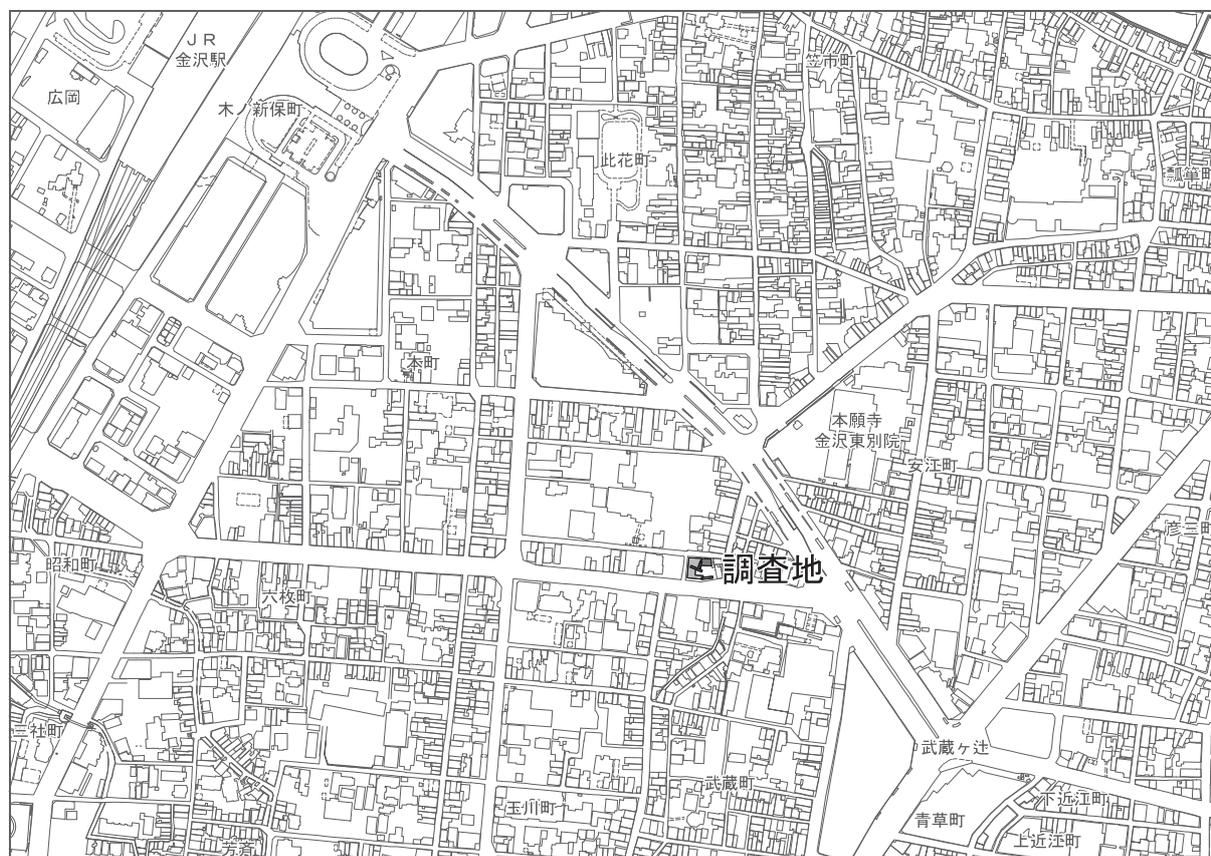
跡、素掘りの堀土居岸、堀土居側の石垣、土居盛土基部、礎石建物等が確認され、升形推定地に良好な状態で遺構が残っていることが確認された。これを受けて、市は開発者に対して、居住代替地を升形推定地以外に変更するよう調整を開始した。さらに、升形遺構を保存活用していくために、平成21年度以降、市有地として買収する計画を策定した。

平成21・22年度には、市有地として買収した範囲において、升形遺構を復元整備するための基礎資料となる惣構遺構の規模・形態や歴史の変遷を明らかにする目的で発掘調査を実施した。平成21年度調査は5月27日～7月27日に実施し、平成20年度調査区を取り囲むように「コ」の字形の調査区(約190㎡)を設定し、升形の角部分を中心とした西堀と北堀、堀内側の升形土居基部の南端部、升形内に建てられた礎石建物跡を確認した。平成22年度調査は11月22日～12月21日に、平成21年度調査区の東側延長部分(約100㎡)を対象に実施し、北堀の下流部分と升形内部の建物跡を確認した。

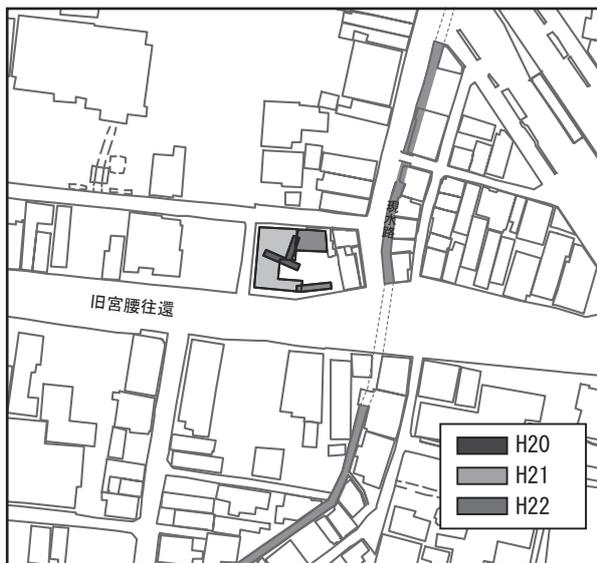
発掘調査終了後の埋め戻しは山砂で行った。将来の復元整備に備えて、石垣・礎石等遺構部分には、山砂で40cm覆った上で約40cm上方にポリエチレン製帯状シート(埋設管表示用シート)で遺構の所在位置を表示した。

調査日誌抄

- 第1次調査
 平成20年7月28日 表土除去
 7月29日 発掘作業開始 発掘調査補助員5名
 7月30日 グリッド杭設定
 8月6日 写真測量
 8月7～8日 埋め戻し
- 第2次調査
 平成21年5月27～29日 表土除去
 6月1日 発掘作業開始 発掘調査補助員11名
 6月8日 グリッド杭設定
 6月17日 西堀埋土から「萬延年製」碗出土
 6月24日 用水・惣構堀検討部会視察
 6月25日 平面写真測量
 7月4日 現地説明会
 7月6～7日 西堀南端サブトレンチで堀底面確認
 7月14日 石垣立面写真測量
 7月25～27日 埋め戻し
- 第3次調査
 平成22年11月18日 表土除去
 11月22日 発掘作業開始 発掘調査補助員10名
 12月2日 グリッド杭設定
 12月11日 現地説明会
 12月13日 平面写真測量
 12月20～21日 埋め戻し



第1図 西外惣構跡升形地点 調査位置図



第2図 調査区配置図



図版1 寛文7年金沢図(大図)
(石川県立図書館蔵) 部分



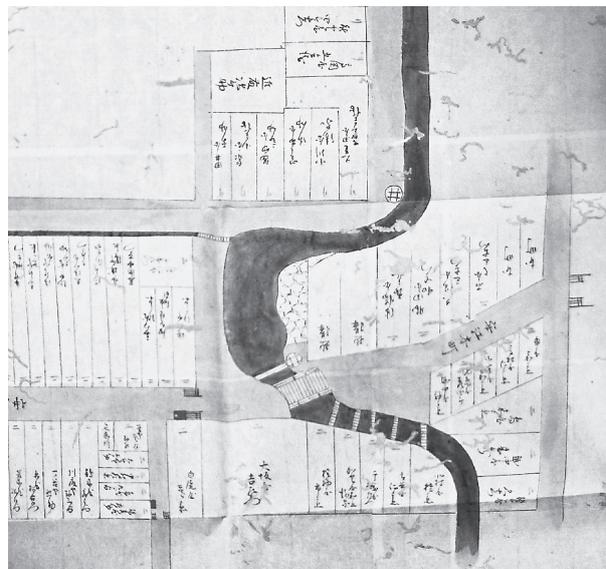
図版2 延宝金沢城下
(石川県立図書館蔵) 部分



図版3 金沢地図(文政期・槻橋弥三郎図)
(金沢市立玉川図書館蔵) 部分



図版4 金沢惣構絵図(文化8年)
(金沢市立玉川図書館蔵) 部分



図版5 金沢町絵図(文化8年)
(金沢市立玉川図書館蔵) 部分

第5節 遺構

1. 調査の方法

グリッド杭は、調査地内を公共測量規定に基づいた10m格子で区切りその交点上に杭を設定し、北西角の交点をA1杭として東方向にA2、A3、南方向にB1、C1と変遷させて杭名とした。遺構の所在位置(発掘区)は、北東角の杭名で示す。

掘削機による表土除去の結果、地表下約25～35cmにおいて江戸時代の遺物包含層を検出したため、この層位以下は手作業での掘削作業とした。

2. 遺構の概要

検出した遺構の計測値および遺構方位等詳細は第1表に示した。本稿では遺構変遷を中心に記述する。

時期区分

遺構変遷の画期としてⅠ～Ⅶ期を設定した。Ⅰ期は西外惣構構築初期の段階である。Ⅱ期は升形の土居内部に土坑が掘削され町屋が建ち始めたと推定される初期の段階である。Ⅲ期は絵図に描かれた初期の段階で既に升形内に町屋が建っていたと考えられる段階である。Ⅳ期は西堀南西部の西面にSA203南側、北面にSA211を築造し、堀を埋め立てた段階である。Ⅴ期は北面のSA211北側にSA210を構築し、西面のSA203を北側に伸ばして西堀をさらに北側へ埋め立てた段階である。Ⅵ期は北面のSA210北側にSA209・SA222、西面にSA204を築いて埋め立て地を北に広げ、升形北西角を全て石垣とした段階である。Ⅶ期は溝SD201と溝SD202を残して堀全体が埋め立てられた段階である。

升形隅部の変遷

Ⅰ期～Ⅳ期は、西堀南側(升形橋側)で埋め立てが進み、Ⅳ期には石垣が築かれたが、升形隅部は土坡の状態であった。Ⅰ期(構築当初)の升形隅部はA3区とB3区の境界付近で基盤となる粘土層を削った斜面として確認され、隅部はやや鈍角で緩やかなカーブを描く。Ⅰ期土居側堀岸斜面について北堀では第4図A-A'断面のA・17層と18層境界(斜度約35°)、B-B'断面の19～21層下面(斜度約40°)、第6図T-T'断面の11～15層下面(斜度約42°)、U-U'断面のSA217北側(斜度約42°)で、西堀ではC-C'断面の19～20層下面(斜度約35°)で確認された。Ⅴ期になると北堀のⅠ期堀岸の延長線に近い位置にSA210が築かれ、升形北西隅部は約5.7m西縁側へ延長され、SA210西端部とSA204南側北端部の交点付近になる。さらにⅥ期では北堀にSA209とSA222が築かれ、西堀ではSA204が北へ約2.8m延伸され、SA209西端部とSA204北端部の交点が升形北西隅部となる。Ⅵ期の升形隅角石は、Ⅶ期に堀が埋め立てられ、西堀石垣が溝SD201・202の側石に転用されたときにも温存された。隅角石は築石部と同じ安山岩質の野石(川原石)を使用しているが、石材の大きさが長さ約40～45cm、幅約30cm、厚さ約25cmと築石部より大粒で、細長い枕形もしくは直方体を呈しており、長手を左右に振り分けて積む算木積み

の技法で3段分積み上げ、短辺の石面を割り取って隅石部の小口を揃えている。Ⅳ・Ⅴ期の隅角石は抜き取れているとみられる。

西堀の変遷とSD201

西堀南端部付近のⅥ期堀底において約1.1×1.3m四方の堀底サブトレンチを掘削し、西堀における第Ⅰ期(構築当初)の堀底の確認を行ったところ、升形内部の第Ⅱ期生活面からみて比高差で約3mの深さの位置で無遺物のややしまった砂層を確認した。直上までの堆積層では、17世紀初頭の陶磁器片を確認したことから、第Ⅰ期の堀は深さ約3mであったと推定される。また、C3区SK203南西側やSA221下からA3～B3区では基盤層を掘って構築したⅠ期土居側堀岸斜面を確認しており、Ⅰ期の西堀幅は道路際の敷地境界までで約11mとなる。Ⅱ～Ⅲ期の西堀岸の変遷は明確でない。Ⅳ期石垣のSA203南側背面でⅠ期以降の埋め立て地となったB2区、C2区、C3区において、上層遺構を保護するため、充分な試掘坑を設定できなかったためである。

Ⅳ期には西堀南西部においてSA203南側を西面とし、SA211を北面として堀の埋め立てを行った。さらにⅤ期には北面のSA211北側にSA210を構築し、西面のSA203を北側に伸ばして西堀をさらに北側へ埋め立てた。そしてⅥ期には北面のSA210北側にSA209・SA222、西面にSA204を築いて埋め立て地を北に広げ、升形北西角を全て石垣とした。また、SA204南側とSA203北端はSA205で緩やかにつながれているが、SA205下端の高さからⅥ期中に施工されたと推測される。SA203・SA204で囲まれた内角部分の水流の停滞を改善する意図があったのであろうか。Ⅶ期にはSA204北端の升形隅石から北側にSA208を継ぎ足し、また、SA208・SA204・SA205・SA203に直面してSA207・SA206を築き、幅0.7mの溝SD202と幅0.5mの溝SD201を残して残りの西堀を全て埋め立てた。西堀石垣のⅣ・Ⅴ期隅角石は抜き取られたと考えられるが、抜き取りの際に付近の築石が積み直しされたとみられ、Ⅳ～Ⅵ期にかけての石垣の境界が不明確となっている。しかし、北堀石垣の位置に対応して西堀石垣下端の高さが段階的に浅くなっていることから、西堀石垣の変遷を追うことが出来る。SA203南側下端には針葉樹の角材による約9cm角の根太を認めることができ(F-F'断面)、SA211以北のSA203北側下端よりも約50cm低い。SA204下端はSA203北側下端よりも約10cm高い。明治期の溝の石積SA208下端はSA204よりも約25cm高い。よって、堀石垣から推測できる堀深さはⅣ期が約1.5m、Ⅴ期が約1m、第Ⅵ期が約90cm、Ⅵ期の溝SD201・SD202の深さは約65cmとなる。また、SA203ではSA211以南・以北ともに石材の野石(川原石)の大きさが大小さまざまで、奥行きを長手として乱積み風に積み、石面は突出部を欠きとる程度に調整している。SA204では幅約30cm、高さ約20cm、長さ約20～25cmの粒が揃った石材を石

面を長手として横目地を揃えるように積み上げている。SA205はやや乱雑に積み上げられており横目地は通らない。SA208は、SA204と比較して最下段は同等程度の大きさの石材だが2段目以上はやや小粒で、横目地を意識して積み4段目で天場を揃える。

第5図F-F'断面74～76層上面はⅥ期末の堀底、63～77層はⅦ期の堀埋土、45・46層はⅦ期のSD201掘方、47～50層はSD201埋土、第7図Y-Y'断面19・20層上面はⅥ期末の堀底、10～18層はⅦ期の堀埋土、5～7層はⅦ期のSD201埋土、Z-Z'断面20層上面はⅥ期末の堀底、13～18層はⅦ期の堀埋土、12層はⅦ期のSD202掘方、7～11層はSD202埋土である。

北堀の変遷

西堀内に構築されたSA211、SA210は北側を面としており、北堀のSA209・SA222へと変遷するため、北堀石垣として触れる。西堀における埋め立てに伴い、SA211→SA210→SA209・SA222と変遷する。SA211は長さ約3.35m、高さ約0.55mの石垣で、大小の野石を奥行を長手とし、やや横目地を意識しながら3段まで積み上げている。確認できる34個の石面はすべて無調整である。SA210は長さ2.45m、高さ1.0mの石垣で、大小まばらな野石を石面を長手として乱層積み6～7段まで積み上げている。確認できる53個中5個が石面を大きく割り取る調整、7個が突出部を欠きとる調整を施している。このほか、板状で小粒な間詰め石が10個、上端に近い位置に凝灰岩質切石が1個ある。SA209は長さ約6m、高さ約1.0mの石垣で、隅角石から約3mまでの最下段に幅約40～60cm、厚さ約25～30cmの大形の石材を並べ、幅約25～30cm、厚さ約15～20cmの粒か揃った野石を横目地を揃えて積んでいる。西端部は面を割り取った野石による隅角石としており、東端部は幅約45cm、厚さ20cmのやや大振りな石材を4段積み上げて側面を斜面として終端させ、SA222はその上に積み足されている。確認できる築石部の111個中42個の石面は無調整で、50個が石面を大きく割り取り、5個が突出部を欠きとり、8個の小石の間詰め石がある。また、隅角石の控え天場には凝灰岩切石が置かれている。SA222は長さ1.85m、高さ0.7mの石垣で、SA211の東端部側面から積み足され、東側に向かって高さが低減する。大小の石が入り混じり上部ははらみ堀側に傾斜している。19個中11個が石面を大きく割り取っている。

北堀東(下流)側でのⅠ期土居側堀岸斜面は、第12図サ-サ'断面、第7図b-b'断面17・21・22層下面(斜度36°)・c-c'断面(斜度約40°)として認めることができる。Ⅳ期以降、西堀においては石垣の築造を伴う段階的埋め立てを認めることが出来るが、北堀においてはSA209・SA222構築までは基本的に土砂による埋め立てが進んだものと思われる。北堀東側ではⅡ～Ⅶ期に該当すると考えられる漸次的な土居岸部の埋没を認めることが出来るが、現在遺物整理段

階にあるため、詳細な変遷を追うことが出来ない。この北堀東側では、堀底に杭を2本ずつ乃至ジグザグに打ち込み、杭で挟み込むようにして針葉樹板を立てかけて土留めとし、Ⅵ期までにSA209・SA222の延長線上を上場とする位置まで埋め立てられている。Ⅵ期末すなわち北堀が埋められる直前の土居側堀岸の形状は、第7図a-a'断面7・8層(堀岸埋土)と2・5・6層(堀埋め立て土)との境界(上部斜度約66°、下部斜度約25°)、b-b'断面14～16層(堀岸部の埋土)および10～13層(堀底の堆積土)と5～9層(堀埋め立て土)との境界(斜度約85°)が示している。このことから、b-b'断面においてⅠ期からⅥ期末までの間に土居盛土基部の標高において北堀幅が約2.6m狭まっている。

第6図W-W'断面8～10層上面はⅤ期末の堀底、2～7層はⅥ期の堀埋土、第7図a-a'断面7・8層上面はⅥ期末の堀底、1～6はⅦ期の堀埋土、b-b'断面14～22はⅥ期末までの堀埋土、10～13はⅦ期末の堀底、4～9はⅦ期の堀埋土である。

土居跡

土居盛りは第6図T-T'断面12・13層、第7図b-b'断面23・24層で、b-b'断面では基盤となる粘土層から約50cmの厚さが2.2m幅以上の範囲で残り、堀側の斜度が約55°であることを確認した。b-b'断面2層は埋甕4掘り方である。

建物跡

升形内部にあたるC4区では、多数の柱穴と礎石が検出された。調査範囲が狭小なため建物形状が不明なものが多いが、柱間1間(約1.05m)以上×1間(約0.95m)以上の礎石建物SB401と、柱間推定2間以上×1間以上の礎石建物SB402(約1.85m以上×0.9m以上)を検出した。

Ⅳ期にはSA203南側およびSA211を構築し西堀南西部を埋め立て、その上に礎石建物SB201を建てた。SB201は約2.85m×約4.2m以上を測り東西方向が柱間3間(各約0.95m)、南北方向が柱間推定4間(各約1.05m)以上である。

Ⅶ期には埋められた西堀上に礎石建物SB203～SB205、北堀上に礎石建物SB202・土台建物SB208(SA214・SA212・SA301)を建てた。礎石SB203-3には墨書があり、礎石SB202-4には○に十字線の柱位置が墨入れされていた。A3・B3区にはSA216・SA215・SA217を土台とするSB206が建てられている。蔵造りの建物であろうか。また、B2・C2区のSA203上から東側にかけてSA202・SA213を土台とする建物SA202が建てられている。

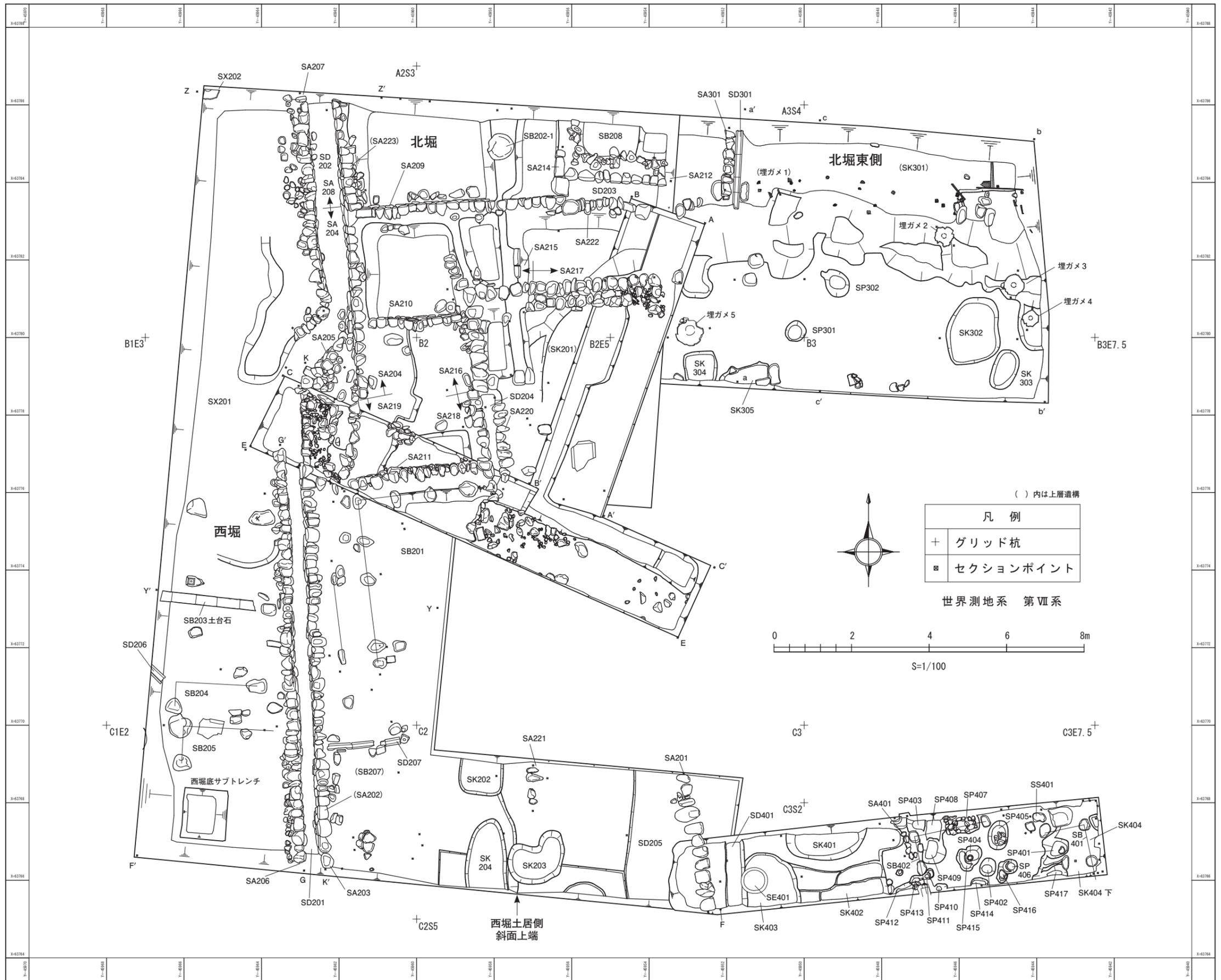
SX202、埋甕1～5は、升形内の建物裏手およびⅦ期以降堀跡上に建てられた家屋に付属する埋甕である。埋甕1を除き越前甕で、内面に灰白色の付着物が付着し便所甕と考えられる。

第1表 遺構一覧表

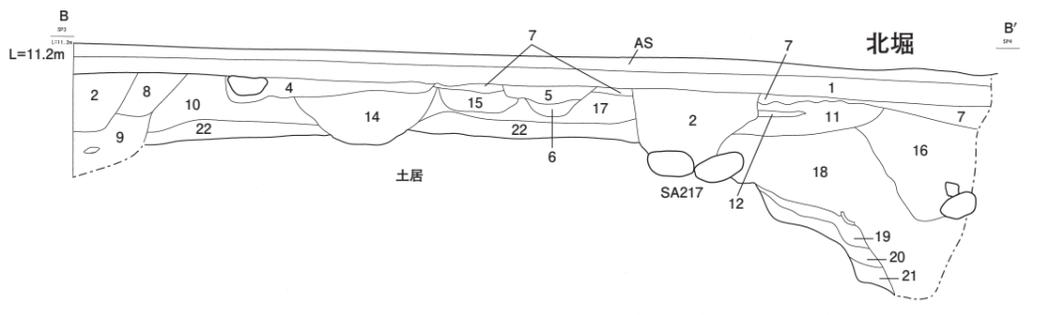
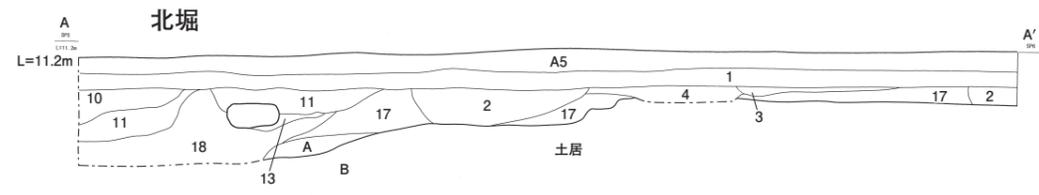
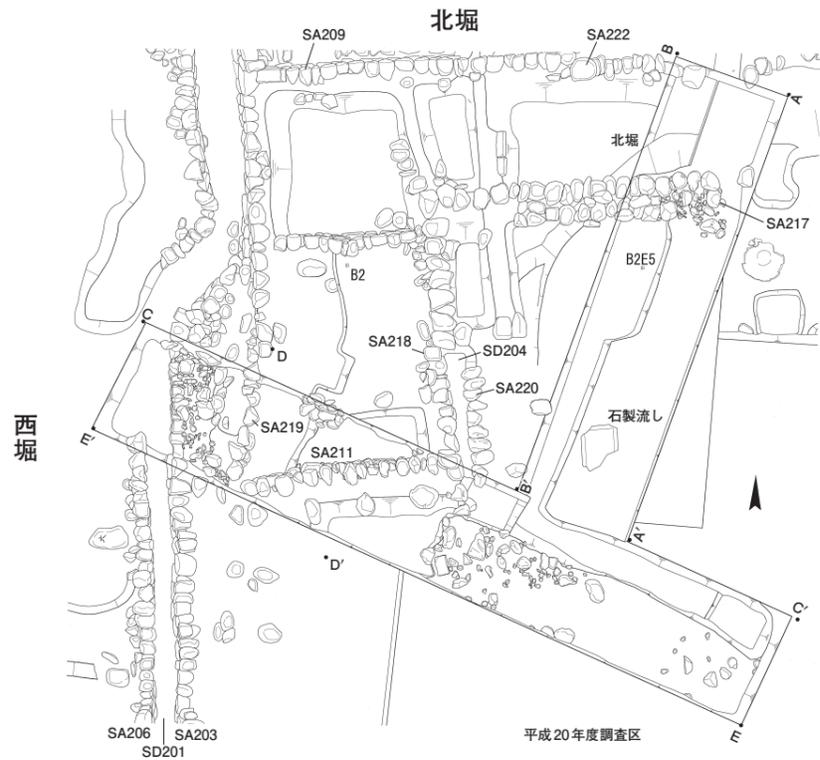
() 付の計測値は最小値・形状は推定

遺構名	調査区	平面形状	主軸方向 座標北から	計測方位 1	計測値 1	計測方位 2	計測値 2	深さ (高さ)	備考	時期	遺構図版
SK201	B3	不明	-	-	-	-	-	-	上層遺構		-
SK202	C3	(方形)	-	西北西 東南東	1.1	北北東 南南西	(0.9)	-	北は区外		-
SK203	C3	不整形	-	西北西 東南東	1.4	北北東 南南西	1.0~1.4	-		Ⅵ期	-
SK204	C3	(長楕円形)	-	東西	1.1	南北	(1.8)	-	南は区外		-
SK301	A4	不明	-	-	-	-	-	-	北堀東側に掘られた攪乱土坑	Ⅶ期	-
SK302	A4・B4	不整形	-	東西	1.4	南北	1.7	0.57			-
SK303	B4	長楕円形	-	西北西 東南東	0.6	北北東 南南西	1.0	0.38			-
SK304	B3	(方形)	-	東西	0.85	南北	(0.75)	0.45	南は区外		-
SK305	B3			西南西 東北東	1.1	北北西 南南東	0.5	0.48	南は区外		-
SK401	C3・C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	2.1	北北西 南南東	(0.7)	0.55	北は区外		第11図
SK402	C4	(長方形)	-	西南西 東北東	(2.3)	北北西 南南東	(0.85)	(0.75)	南は区外		第11図
SK403	C3	(楕円形)	-	西南西 東北東	(1.3)	北北西 南南東	(1.4)	(0.56)	SE401掘方。南は区外、西はSD401	Ⅶ期	第11図
SK404	C4	落込状	-	北西 南東	(1.8)	北東 南西	(2.3)	1.0	南北・東は区外		第11図
SX201	B2	不明	-	東西	(2.4)	南北	(7.0)	-	西堀に掘られた攪乱土坑	Ⅶ期	-
SX202	A2	埋甕	-	直径	(0.6)	-	-	(0.3)	上部欠損		-
埋甕1	A3	埋甕	-	-	-	-	-	-	上部欠損	Ⅶ期	第13図
埋甕2	A4	埋甕	-	直径	(0.55)	-	-	(0.3)	上部欠損	Ⅵ~Ⅶ期	第13図
埋甕3	A4	埋甕	-	直径	(0.6)	-	-	(0.25)	上部欠損	Ⅵ~Ⅶ期	第13図
埋甕4	A4	埋甕	-	直径	(0.45)	-	-	(0.17)	上部欠損	Ⅵ~Ⅶ期	第13図
埋甕5	A3・B3	埋甕	-	直径	(0.8)	-	-	(0.55)	上部欠損	Ⅵ~Ⅶ期	第13図
SE401	C3	円形 凝灰岩製	-	外径	0.7	内径	0.55	(0.6)		Ⅶ期	第11図
SP301	A3	略円形	-	東西	0.5	南北	0.55	0.36			-
SP302	A4	楕円形	-	北西 南東	0.7	北東 南西	0.6	0.33			-
SP401	C4	楕円形	-	西北西 東南東	0.7	北北東 南南西	0.55	0.7	根石あり		第11図
SP402	C4	楕円形	-	東西	0.4	南北	0.5	0.45	根石あり		第11図
SP403	C4	(楕円形)	-	東西	(0.5)	南北	(0.3)	0.3	北は区外、東はSP408		第11図
SP404	C4	楕円形	-	東西	0.5	南北	0.45	0.5	南西はSP415		第11図
SP405	C4	楕円形	-	東西	0.5	南北	0.75	0.6	磔		第11図
SP406	C4	楕円形	-	東西	0.5	南北	0.35	0.5	南西はSP416		第11図
SP407	C4	(長方形)	-	西南西 東北東	0.85	北北西 南南東	(0.45)	0.3	磔		第12図
SP408	C4	(楕円形)	-	西北西 東南東	(0.55)	北北東 南南西	(0.5)	0.3	北は区外、西はSP403、南はSP409		第11図
SP409	C4	楕円形	-	東西	0.6	南北	0.65	(1.0)	北はSP409		第11図
SP410	C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	(0.35)	北北西 南南東	0.2	0.4	南は区外		第11図
SP411	C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	0.3	北北西 南南東	(0.2)	0.3	南は区外、西はSP413		第11図
SP412	C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	(0.65)	北北西 南南東	(0.2)	0.1	南は区外、東はSP413		-
SP413	C4	(円形)	-	西南西 東北東	(0.25)	北北西 南南東	(0.16)	0.3	南は区外、東はSP412、西はSP411		第11図
SP414	C4	(楕円形)	-	東西	0.45	南北	(0.15)	0.35	南は区外		第11図
SP415	C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	(0.35)	北北西 南南東	0.6	0.1	北東はSP404		第11図
SP416	C4	(楕円形)	-	西北西 東北東	0.24	南南西 北北東	0.55	0.45	根石あり		第11図
SP417	C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	(0.9)	北北西 南南東	(0.3)	0.4	南は区外		第11図
SD201	B2・C2	石積溝	3.0° W	北北西 南南東	12.5	西南西 東北東	0.5	0.95	南は区外、北はSD202、北西はSX201が新	Ⅶ期	第5・7図
SD202 北側	A2	石積溝	5.4° W	北北西 南南東	5.6	西南西 東北東	0.7	0.6	北は区外、南はSD201、南西はSX201が新	Ⅶ期	第5・7図
SD202 南側	A2・B2	石積溝	47.2° E	北東 南西	2.2	北西 南東	0.7	0.65		Ⅶ期	第5図
SD203	A3	石積溝	5.7° E	西北西 東南東	2.5	北北東 南南西	0.35	0.35	北辺SA212、西は不明	Ⅶ期	第10図

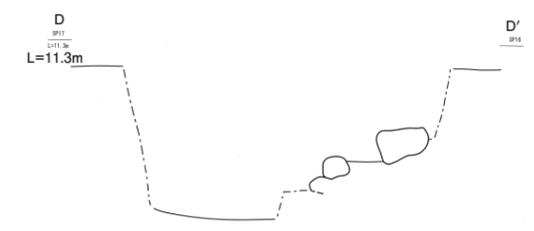
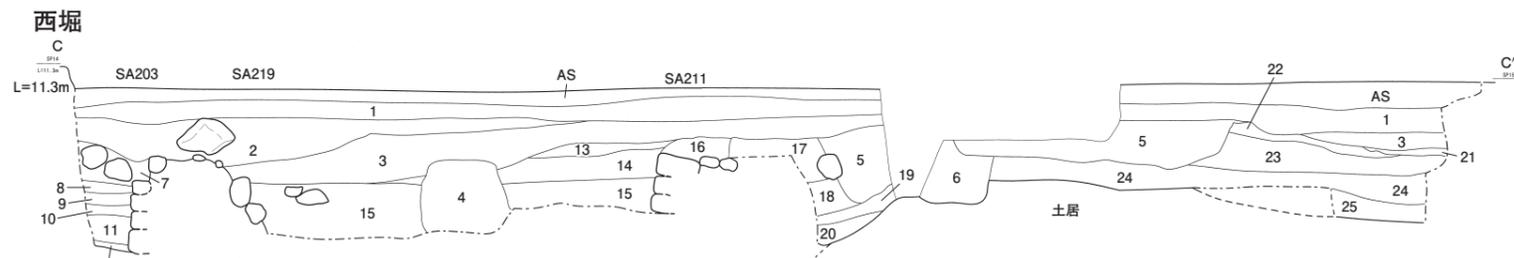
遺構名	調査区	平面形状	主軸方向 座標北から	計測方位 1	計測値 1	計測方位 2	計測値 2	高さ (高さ)	備考	時期	遺構図版
SD204	B3	石積溝	113° W	北北西 南南東	2.3	西南西 東北東	0.25	0.7	西辺SA218、東辺SA220	Ⅶ期	第8・9図
SD205	C3	素掘溝	52° E	南北	3.3	東西	1.0	0.55	南北は区外	Ⅶ期	第8図
SD206	B2	凝灰岩 石礎	45.9° W	北東 南西	0.4	北西 南東	0.2	-	北西は区外	Ⅶ期	第8図
SD207	C2	凝灰岩 石礎2段	3.7° W ~10.8° W	西南西 東北東	1.87	北北西 南南東	0.17	0.3		Ⅶ期	第8図
SD301	A3	凝灰岩 石礎	3.3° E	南北	2.0	東西	0.17	0.13	北は区外	Ⅶ期	第7・10図
SD401	C3	素掘溝	2.7° W	北北西 南南東	1.7	西南西 東北東	0.55	0.4	南北は区外	Ⅶ期	第11図
SA201	C3	東北東に面	120° W	北北西 南南東	(3.6)	-	-	0.22	南北は区外		第12図
SA202	B2・C2	土台石	3.0° W	北北西 南南東	(4.4)	-	-	0.33	SB207西辺	Ⅶ期	第8図
SA203 北側	B2	西堀石垣 西南西に面	0.1° W	北北西 南南東	(9.8)	-	-	1.0	SA211以北。SD201東側に転用、北はSA205	Ⅳ期	第5図
SA203 南側	B2・C2	西堀石垣 西南西に面	3.0° W	北北西 南南東	2.9	-	-	1.95	SA211以南。SD201東側に転用、南は区外	Ⅱ期	第5図
SA204 南側	B2	西堀石垣 西南西に面	4.6° W	北北西 南南東	5.0	-	-	0.65	SD201東側に転用、北は升形隅石でSA208が 新、南はSA205が新	Ⅵ期	第5図
SA204 北側	A2・B2									V期	
SA205	A2・B2	SD202南東側 北西に面	43.7° E	南西 北東	1.35	-	-	0.8	北はSA204が古、南はSA203	V~Ⅶ期	第5図
SA206	B2・C2	SD201西側 東北東に面	2.9° W	北北西 南南東	11.0	-	-	0.95	南は区外、北はSX201が新で破壊	Ⅶ期	第5図
SA207 北側	A2	SD202西側 東北東に面	6.0° W	北北西 南南東	5.5	-	-	0.65	北は区外	Ⅶ期	第5図
SA207 南側	A2	SD202北西側 南東に面	50.9° E	南西 北東	1.3	-	-	0.45	南はSX201が新で破壊	Ⅶ期	第5図
SA208	A2	SD202東側 西南西に面	6.8° W	北北西 南南東	(2.9)	-	-	0.75	北は区外、南はSA204・SA209が古	Ⅶ期	第5図
SA209	A2・A3	北堀石垣 北北西に面	3.8° W	西南西 東北東	6.0	-	-	1.0	西は升形隅石、東はSA222	Ⅵ期	第6図
SA210	A2・A3	北堀石垣 北北西に面	3.1° W	西南西 東北東	2.45	-	-	1.0	西はSA204、東はSA216	V基	第6図
SA211	B2・B3	北堀石垣 北北西に面	6.5° W ~12.1° W	西南西 東北東	3.35	-	-	0.55	西は終端(欠損か)、東はSA218	Ⅳ期	第6・8図
SA212	A3	SD203・土台石 南南西に面	3.5° E	西北西 東南東	2.65	-	-	0.2	SD203北側、SB208南辺、西は不明	Ⅶ期	第10図
SA213	B2・C2	土台石 北北西に面	3.0° W	西南西 東北東	2.5	-	-	-	SB207北辺、東は区外	Ⅶ期	第8図
SA214	A3	土台石 西に面	3.3° E	南北	1.2	-	-	0.3	SB208西辺、北は区外	Ⅶ期	第10図
SA215	A3	土台石 北北西に面	1.8° W	西南西 東北東	1.4	-	-	0.25	SB206北辺北西角。東はSA217	Ⅵ~Ⅶ期	第6・9図
SA216	A3・B3	土台石 西南西に面	6° W	北北西 南南東	2.7	-	-	0.45	SB206西辺。南はSD204が古	Ⅵ~Ⅶ期	第6・9図
SA217	A3	土台石 2面	3.5° W	西南西 東北東	3.4	北北東 南南西	0.75	0.55	SB206北辺北東側、西はSA215、東は不明	Ⅵ~Ⅶ期	第6・8・9図
SA218	B3	SD204 東北東に面	11.3° W	北北西 南南東	2.65	-	-	0.7	SD204西側。北はSA216、南は終端	V期以降	第6・8・9図
SA219	B2	列状基石	0.5 ~16.5° E	南南西 北北東	2.0	-	-	0.4	北はSA204	V期	第8図
SA220	B3	SD204 西南西に面	5.7° W	北北西 南南東	2.0	-	-	0.25	SD204東側。南北は終端	V期以降	第6・8図
SA221	C3	西に面	4.6° W	南北	0.9	-	-	0.15	土居裾の土留め石か。裾部から素掘の土居側 岸が下がる	Ⅳ期以降	第12図
SA222	A3	北堀石垣 北に面	3.6° W	東西	1.85	-	-	0.7	西はSA209、東は終端	Ⅵ期	第6・10図
SA223	A2	土台石 西に面	6.0° W	南北	1.15	-	-	0.2	南北はSB202礎石	Ⅶ期	第10図
SA301	A3	土台石 西に面	4.3° E	南北	(1.7)	-	-	0.3	北は区外	Ⅶ期	第10図
SA401	C4	石列	16.5° W	北北西 南南東	0.75	-	-	0.07			第11図
SB201	B2・B3	建物礎石	7.0° W	西南西 東北東	2.85	北北西 南南東	(4.2)	-		Ⅳ期	第9図
SB202	A2・A3	建物礎石	2.2° W	北北西 東南東	4.5	北北東 南南西	(3.6)	-		Ⅶ期	第10図
SB203	B2	建物土台 礎石	5.6° E	西北西 東南東	(2.95)	北北東 南南西	(2.4)	-		Ⅶ期	第8図
SB203 土台	B2	凝灰岩 切石	5.6° E	西北西 東南東	2.5	北北東 南南西	0.25	0.15		Ⅶ期	第7・8図
SB204	B2	建物礎石	1.0° E	西北西 東南東	(2.9)	北北東 南南西	(0.95)	-		Ⅶ期	第8図
SB205	B2・C2	建物礎石 根石	1.0° E	西北西 東南東	1.8	北北東 南南西	0.9	-		Ⅶ期	第8図
SB206	A3・B3	建物土台	5.0° W	西南西 東北東	5.1	北北西 南南東	2.7	-	西辺SA216、北辺SA216・SA217、東辺不明	Ⅵ期	第9図
SB207	C2・C3	建物土台	3.0° W	西南西 東北東	(3.0)	北北西 南南東	(3.7)	-	西辺SA202、北辺SA213、東辺不明	Ⅶ期	第8図
SB208	A3	建物土台	4.0° E	西北西 東南東	(2.9)	北北東 南南西	(1.5)	-	南辺SA212、西辺SA214。北は区外、東は不明	Ⅶ期	第6・10図
SB401	C4	建物礎石	7.0° W	西南西 東北東	(1.0)	北北西 南南東	0.95	-			第12図
SB402	C4	建物礎石	12.0° W	西南西 東北東	(1.85)	北北西 南南東	0.9	-			第12図



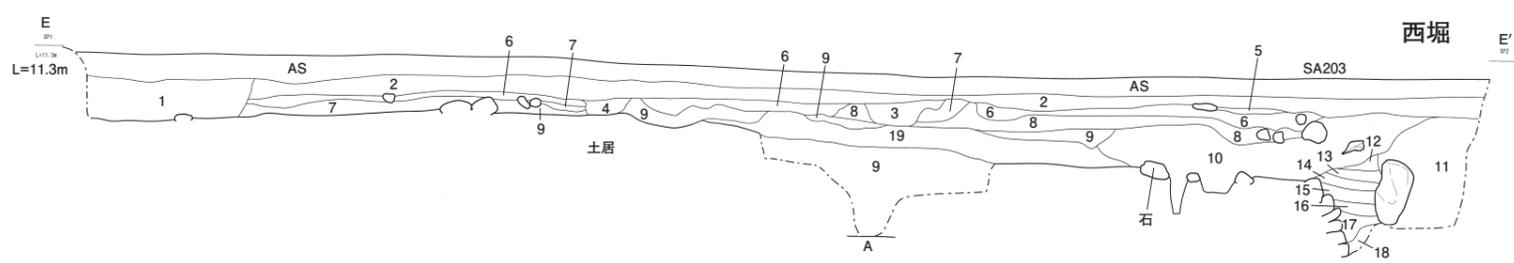
第3図 全体遺構図



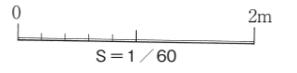
- A-A'断面・B-B'断面共通**
1. 砕石
 2. 10cm円礫空隙有
 3. 10YR8/3浅黄橙色砂〔単層〕
 4. 礫
 5. 10YR4/1褐灰色砂礫土(炭多)〔単層〕
 6. 10YR3/1黒褐色砂礫土(炭多)〔単層〕
 7. 2.5GY2/1黒色砂礫土+10YR4/3に黄褐色砂礫土(炭少)〔互層〕
 8. 10YR8/6黄橙色砂礫土(炭微)〔互層〕
 9. 10YR4/3に黄褐色砂礫土(焼土含)〔互層〕
 10. 10YR3/1黒褐色砂礫土(炭少)+5cm未満礫〔地山ブロック少混入、単層〕
 11. 10YR2/3黒褐色砂礫土(炭少)〔地山ブロック少混入、単層〕
 12. 10YR7/6明黄褐色粘土
 13. 礫
 14. 10YR4/3に黄褐色砂礫土(炭多)〔互層、貝殻〕
 15. 10YR4/3に黄褐色砂礫土(炭多)〔地山ブロック混入、単層〕
 16. 10YR2/3黒褐色礫(炭少)〔単層〕
 17. 10YR3/1黒褐色砂質土(炭少)〔地山ブロック少混入、単層〕
 18. 10YR2/3黒褐色砂礫土(炭多)+5~15cm礫〔単層、底で鉄分沈着〕
 19. 10YR3/3暗褐色砂質土(炭微)+5cm未満礫少〔互層〕
 20. 10YR4/1褐灰色粘質土〔単層〕
 21. 10YR5/3に黄褐色粘質土〔単層〕
 22. 10YR1.7/1黒色砂質土(炭微)〔地山ブロック混入、錯綜〕
- A. 10YR7/6明黄褐色粘土
B. 10YR8/6黄橙色粘土



- C-C'断面**
1. 砕石
 2. 攪乱(ガラス瓶・プラスチック含)
 3. 2.5GY2/1黒色砂礫土(炭多)+10YR4/3に黄褐色砂礫土(10cm未満)〔互層、B-B'断面の7〕
 4. 40cm以上集石
 5. 10~30cm円礫空隙有
 6. 土坑5覆土
 7. 10YR6/3に黄褐色粗砂
 8. 10YR6/3に黄褐色細砂
 9. 10YR6/3に黄褐色細砂
 10. 10YR6/3に黄褐色粗砂
 11. 10YR2/1黒色砂質土
 12. 10YR2/1黒色砂質土〔地山ブロック混入〕
 13. 10YR8/4浅黄橙色砂礫土(炭微)+10cm礫〔単層〕
 14. 10YR4/3に黄褐色砂質土(炭多)+10cm未満礫多〔互層〕
 15. 10YR4/3に黄褐色砂礫土(炭多)〔互層、E-E'断面の9〕
 16. 10YR8/4浅黄橙色砂質土(炭微)+5cm未満礫〔単層〕
 17. 10YR4/3に黄褐色砂質土(炭多)+10cm未満礫多〔互層〕
 18. 10YR4/3に黄褐色砂礫土(炭多)〔互層〕
 19. 10YR2/3黒褐色砂礫土(炭少)+5cm未満礫多〔互層〕
 20. 10YR8/6黄橙色砂礫土+土層19〔単層〕
 21. 10YR3/1黒褐色砂質土(炭少)〔地山ブロック少混入、単層〕
 22. 10YR3/1黒褐色砂質土(炭少)〔地山ブロック少混入、単層、21より黒い〕
 23. 10YR3/1黒褐色砂質土(炭少)〔地山ブロック少混入、単層、22より黒い〕
 24. 10YR1.7/1黒色砂質土(炭微)〔地山ブロック混入、錯綜、B-B'断面の22〕
 25. 10YR1.7/1黒色砂質土(炭微)〔地山ブロック多混入、錯綜〕

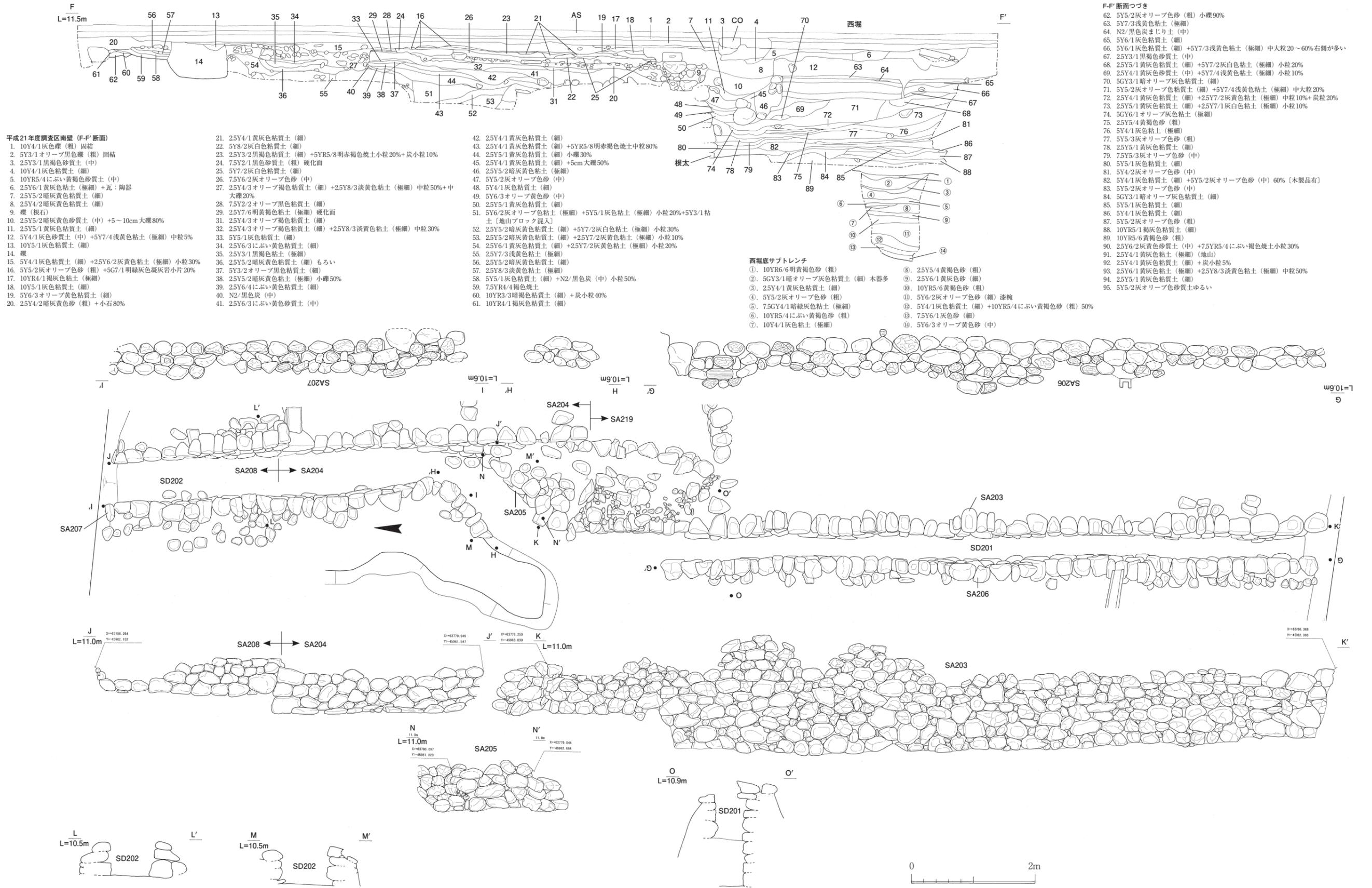


- E-E'断面**
1. 砕石
 2. 砕石
 3. 2.5GY2/1黒色砂礫土(貝・炭微)+3cm未満礫
 4. 5G4/1暗緑灰色粘質土(貝多)〔単層〕
 5. 10YR7/3に黄褐色砂質土(炭少)地山質〔単層〕
 6. 2.5GY2/1黒色砂質土(炭少)+10YR4/3に黄褐色砂質土〔互層〕
 7. 10YR3/1黒褐色砂質土(炭少)〔地山ブロック少混入、単層〕
 8. 2.5GY2/1黒色砂礫土(炭多)+10YR4/2灰黄褐色砂礫土+10cm未満礫〔互層〕
 9. 10YR7/3に黄褐色砂質土(炭少)地山質〔単層〕
 10. 攪乱(ガラス瓶・プラスチック含)
 11. 10YR2/1黒色砂礫土+5cm未満礫
 12. 10YR6/3に黄褐色粗砂
 13. 10YR6/3に黄褐色細砂
 14. 10YR6/3に黄褐色粗砂
 15. 10YR6/3に黄褐色粗砂
 16. 10YR2/1黒色細砂
 17. 10YR2/1黒色砂質土
 18. 10YR2/1黒色粘質土
 19. 10YR7/3に黄褐色砂礫土〔単層〕
 20. 10YR4/3に黄褐色砂礫土(炭多)〔互層、C-C'断面の15〕
- A. 10YR8/6黄褐色粘土〔地山〕



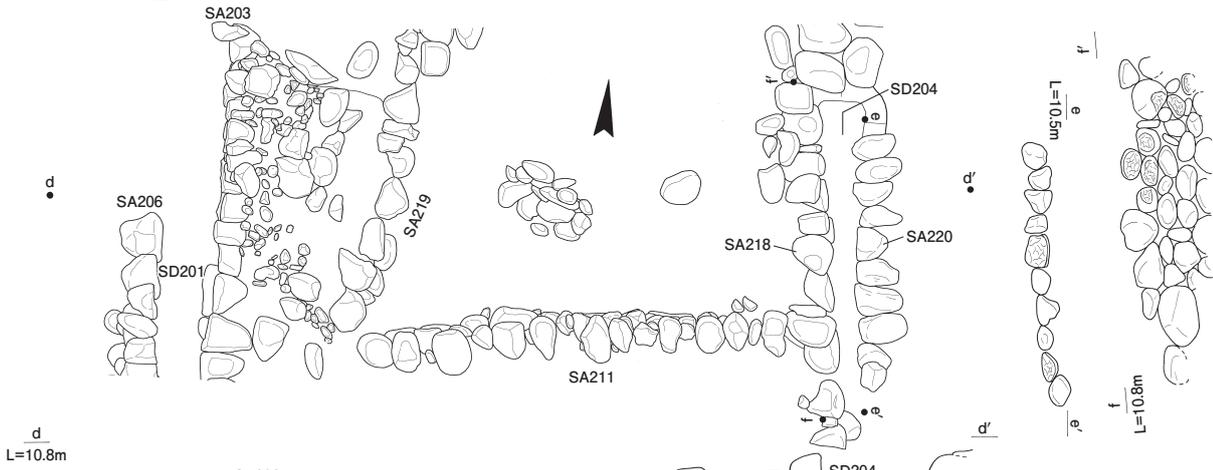
第4図 平成20年度調査区

平成21年度調査区南壁

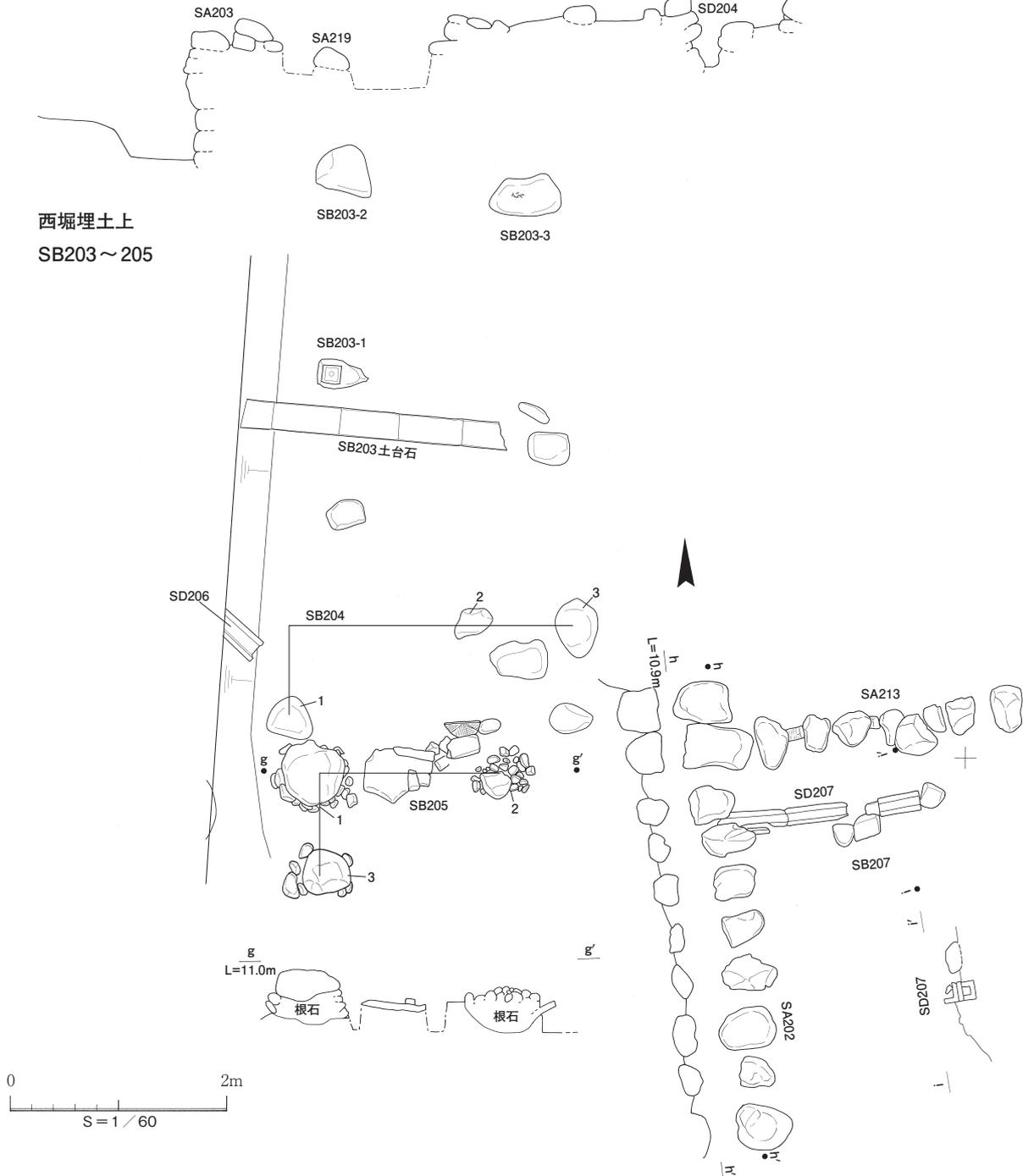


第5図 西堀石垣、SD201、SD202

SD204 周辺

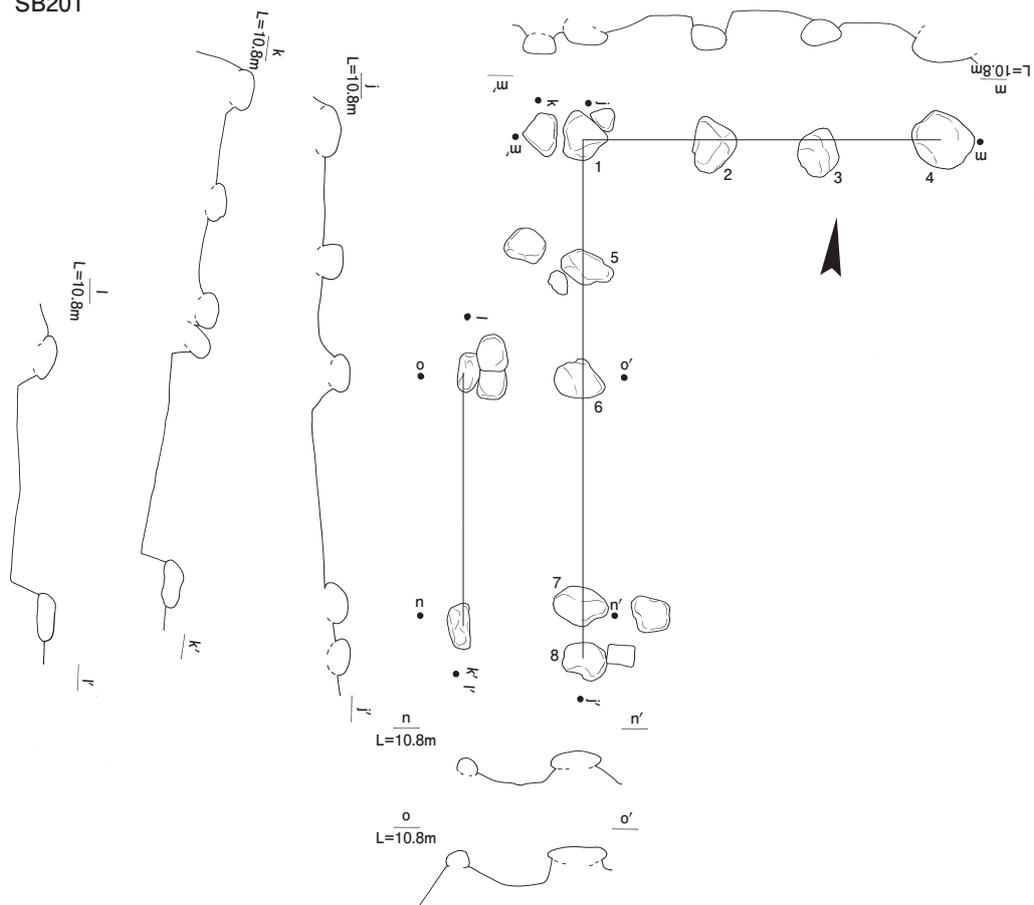


西堀埋土上
SB203~205

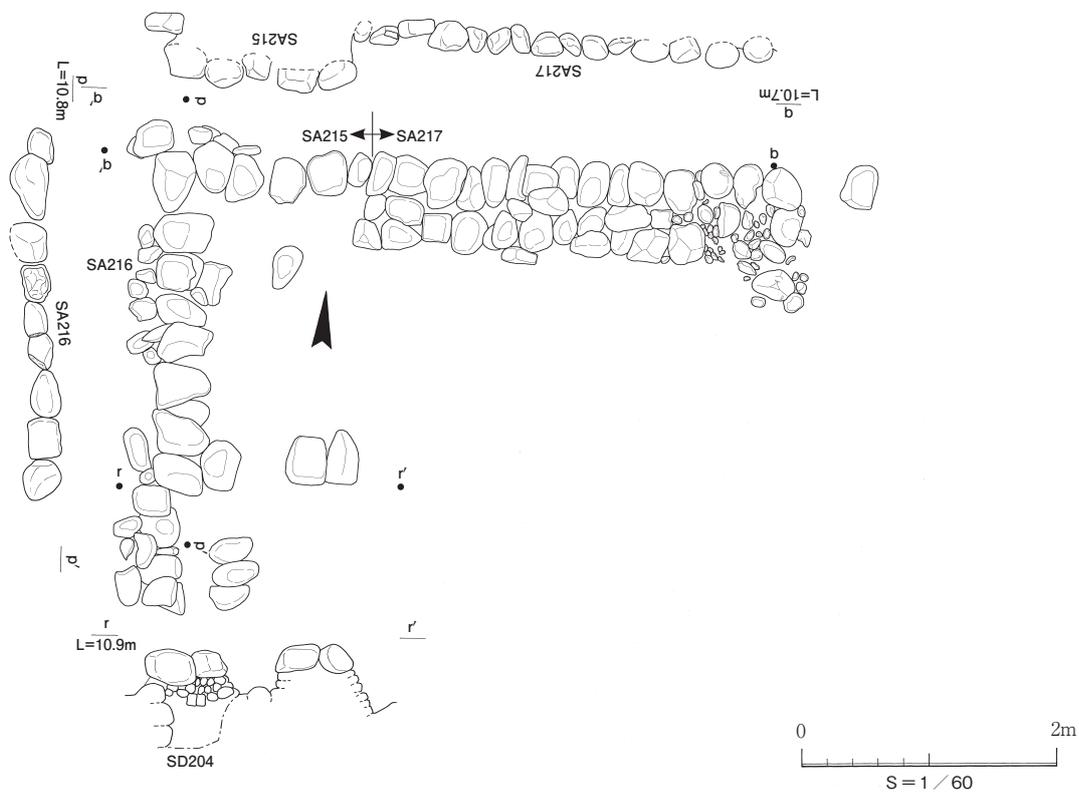


第8図 SD204、SD205、SA202、SA211、SA213、SA217、SA219、SA220、SB203~SB205、SB207

SB201

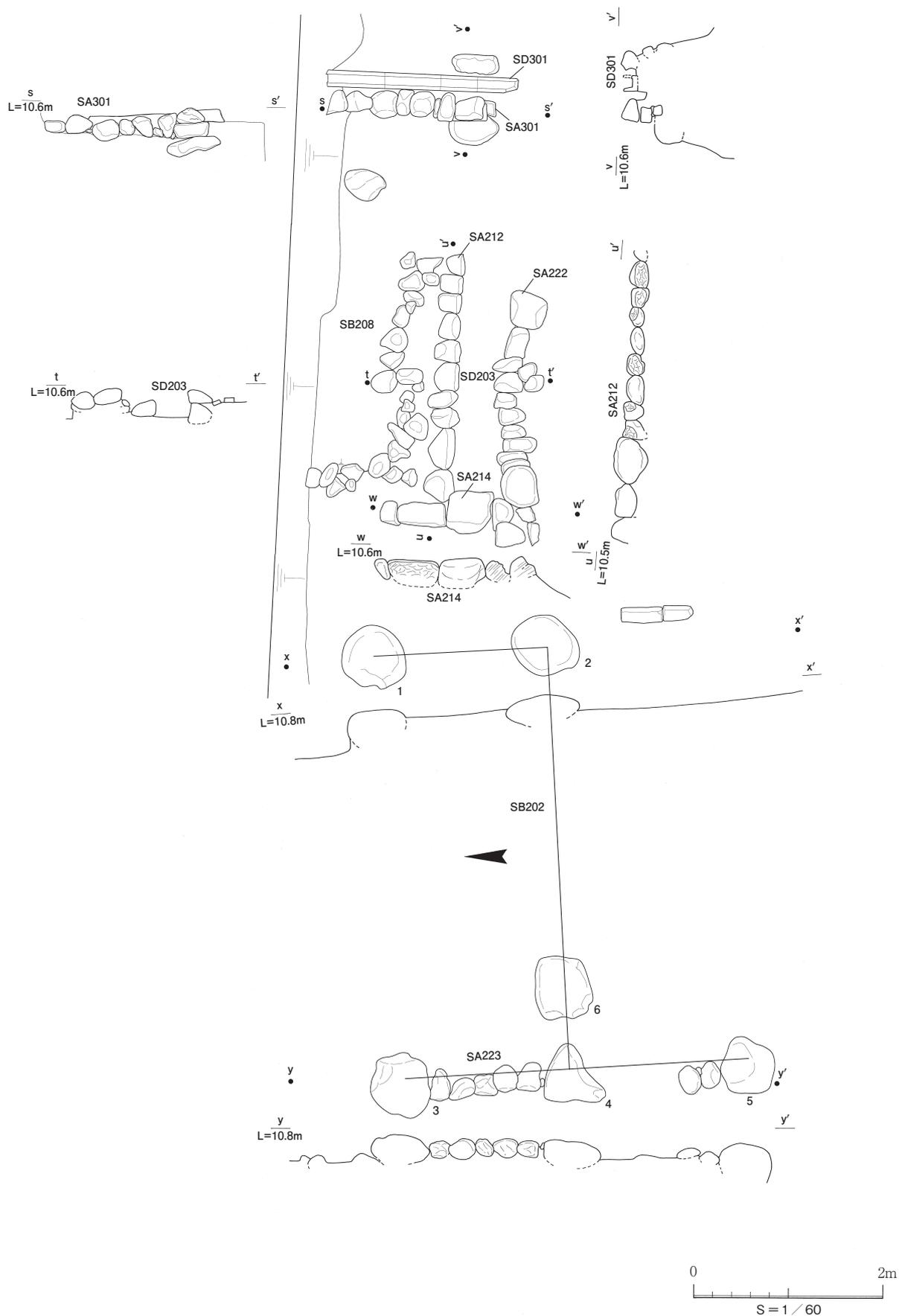


SB206

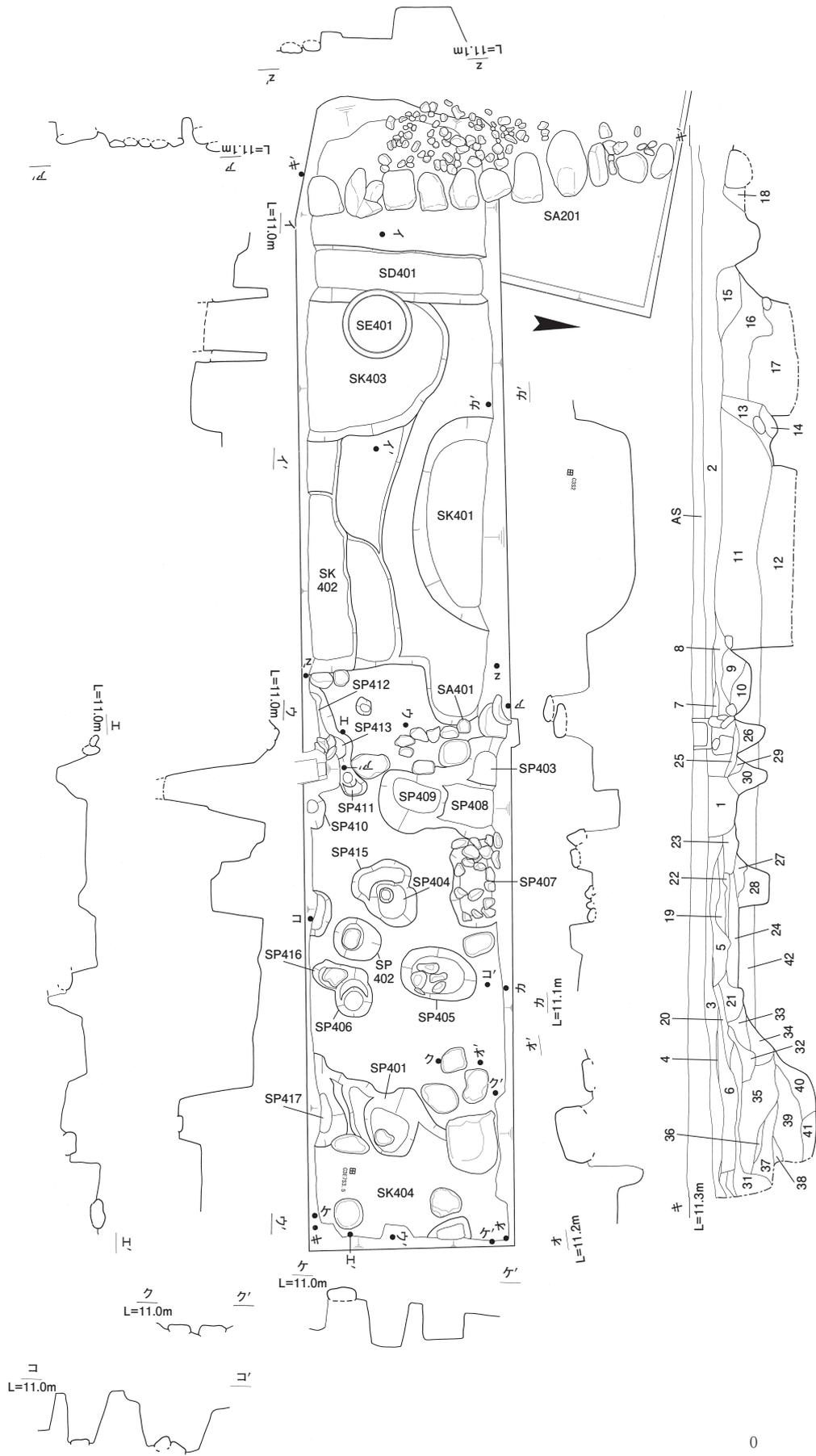


第9図 SB201、SB206

北堀埋土上
SD203、SB202



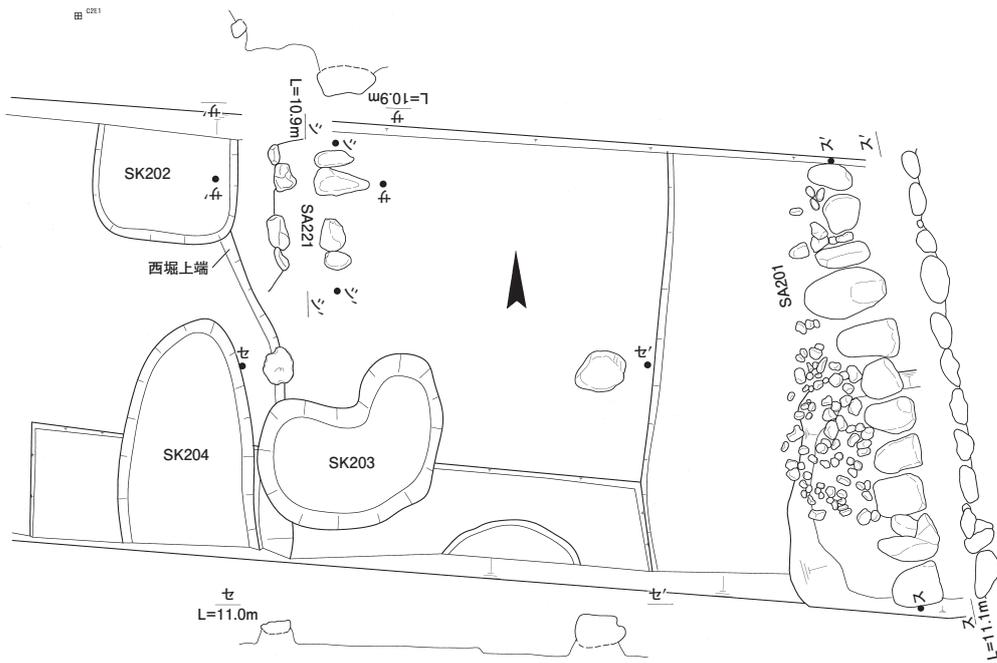
第10図 SA212、SA214、SA222、SA223、SA301、SD203、SD301、SB202、SB208



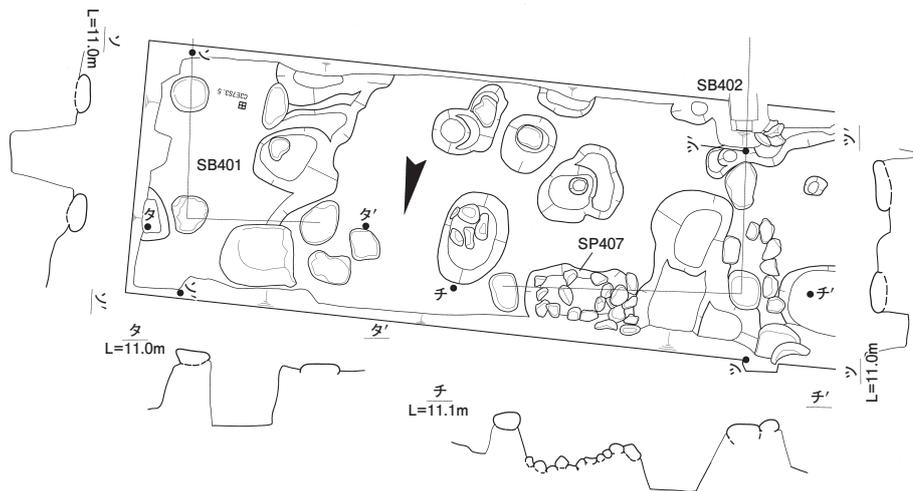
- 平塚22年層 調査区南東部北面(キ・キ'断面)
1. 5Y5/2灰才片一ツ色砂質土(中)+中礫90%
 2. 5Y4/1灰色粘質土(細)+小礫20%
 3. 5Y5/1灰色砂質土(中)+中礫40%
 4. 25Y7/6明黄褐色粘質土(細)
 5. 10YR4/2灰黄褐色粘質土(細)+中礫30%
 6. 黄 礫
 7. 25Y7/4浅黄色粘土(極細)
 8. 5Y4/1灰色砂質土(中)+極小礫30%+炭小礫10%
 9. 10YR4/1褐灰色粘質土(細)
 10. 25Y5/2暗灰色粘質土(細)+25Y7/3浅黄色粘質土(細) 中礫50%
 11. 25Y5/2暗灰色粘砂質土(細)
 12. 中灰礫
 13. 5Y4/1灰色砂質土(中)
 14. 25Y3/4淡黄色粘土(極細)+炭礫小礫90%
 15. 25Y4/2暗灰色粘質土(細)
 16. 25Y4/1黄褐色粘質土(細)
 17. +5G1/1暗才片一ツ色粘質土(細) 中礫20%
 18. 10YR4/1褐灰色粘質土(細)+25Y7/2暗黄色粘質土(細) 中礫50%
 19. 25Y5/2暗灰色粘質土(細) 中礫20%
 20. 25Y4/2暗灰色粘質土(細)
 21. 25Y3/2暗黄色粘質土(細)+25Y8/3淡黄色粘土(極細) 中礫40%+炭小礫50%
 22. 25Y3/1黑褐色粘質土(細)+炭小礫90%
 23. 25Y4/1黄褐色粘質土(細)+炭小礫20%
 24. 25Y3/1黑褐色粘質土(細)+炭小礫20%
 25. 25Y2/1黄褐色粘質土(細)+炭小礫50%
 26. 25Y4/1褐灰色粘質土(細)+炭小礫50%
 27. 25Y5/1黄褐色粘質土(細)+炭小礫40%
 28. 25Y4/1黄褐色粘質土(細)+炭小礫20%
 29. 25Y7/3浅黄色粘質土(極細) 中礫50%
 30. 25Y2/1黑褐色粘質土(細)
 31. 25Y4/1黄褐色粘質土(細)+炭小礫20%
 32. 75YR4/1暗灰色粘質土(細)+炭・焼土小礫70%
 33. 10YR4/1褐灰色粘質土(極細) 中礫40%
 34. 25Y4/1黄褐色粘質土(細)+炭小礫わずかに含む(焼土わずか)
 35. 10YR5/3に多い黄褐色砂質土(中)
 36. 10YR3/1黑褐色粘質土(細)+小礫50%
 37. 25Y4/2暗灰色粘質土(細)
 38. 25Y2/1黑褐色粘質土(細)
 39. 25Y7/4浅黄色粘質土(細)+25Y7/4浅黄色粘土(極細) 大礫30%
 40. 25Y7/4浅黄色粘質土(極細)
 41. 25Y3/1黑褐色粘質土(細)+25Y6/3に多い黄褐色粘質土(細) 中礫50%
 42. 25Y7/4浅黄色粘質土(極細)

第11図 南東部(升形内)建物跡①

南東部西堀上端～ SA201

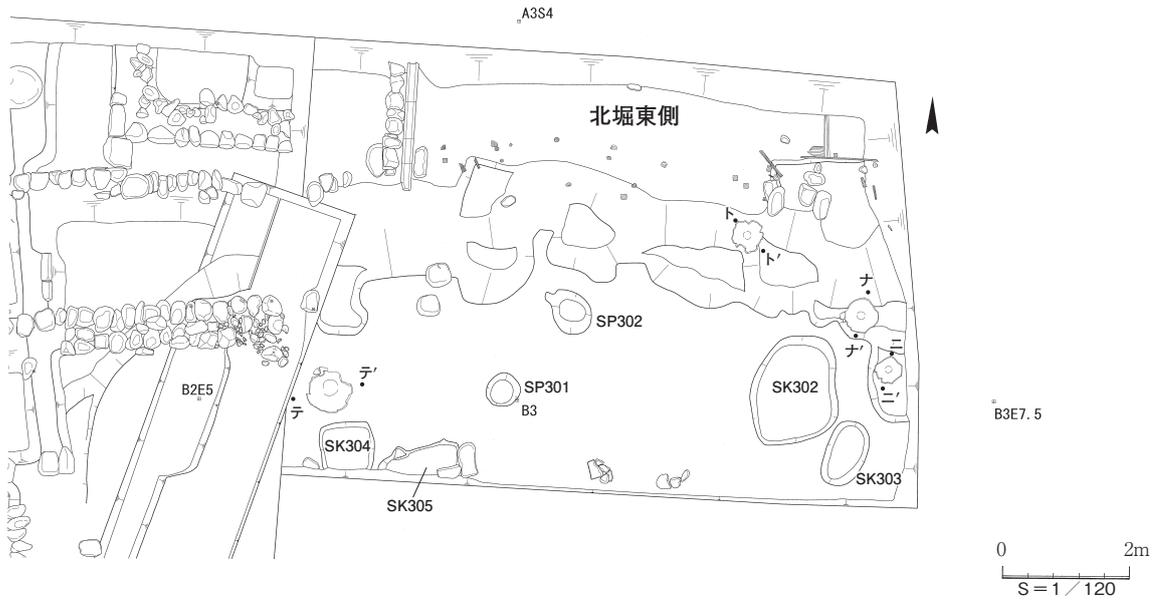


南東部（升形内）建物跡

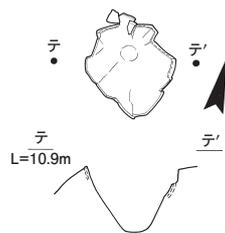


第12図 SA201、南東部（升形内）建物跡②

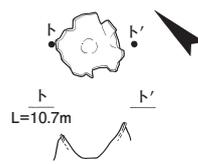
調査区北東側



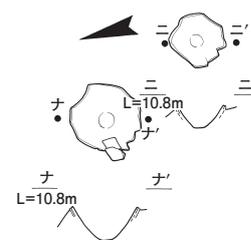
埋ガメ 5



埋ガメ 2

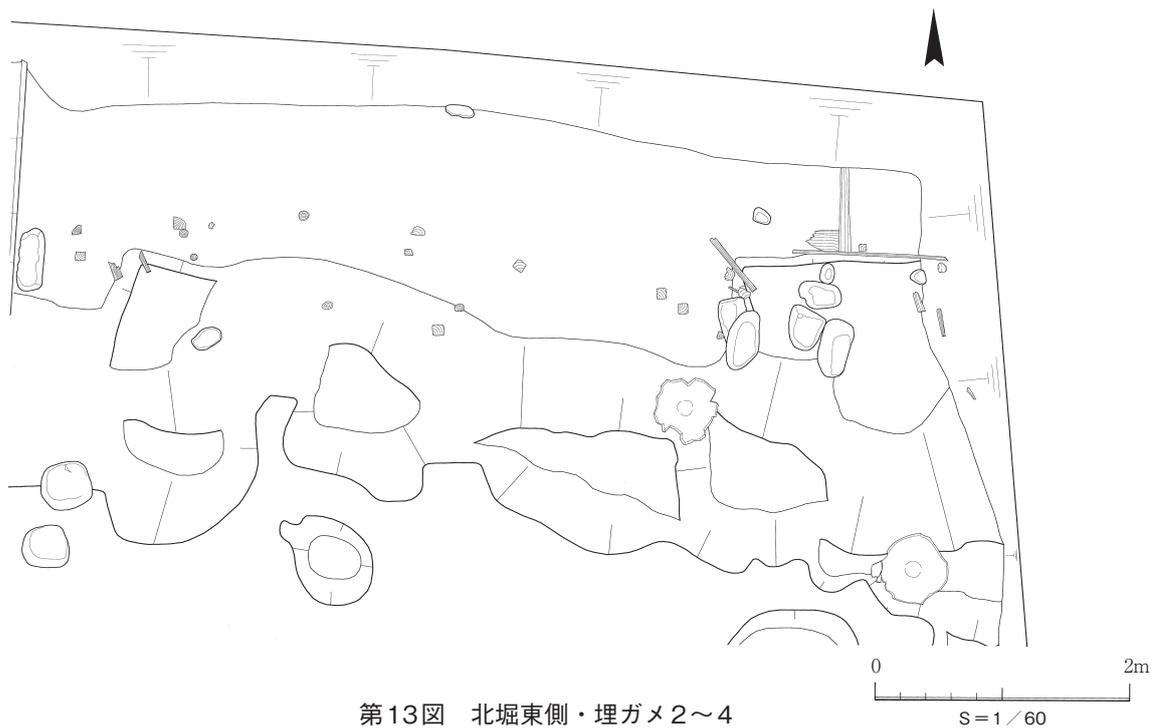


埋ガメ 3・埋ガメ 4



北堀東側杭・関板

A3S4
B110.939



第13図 北堀東側・埋ガメ 2~4

第3章 総括

本調査で対象とした調査地は、升形の北辺および西辺にあたり、調査区は升形の西・北堀から堀土居側（升形側）岸部および升形内部に設定した。南堀および堀外側岸部については、現行の道路下にあたるため未調査で、堀堆積土および埋め土は調査区外へ続いていたため、堀幅については、検出幅よりも広がったと考えられる。また、各期の年代的な位置づけについては、遺物の整理途中であるため暫定的なものである。

本報告では、升形の変遷を7期に分けて記述した。そのうち、石垣の構築を伴いながら堀を埋め、堀の平面形状が大きく変化するの、IV期以降である。

第Ⅰ～Ⅲ期（17世紀初め～17世紀後半）は、土居側堀岸が土坡で、調査区内で堀岸としての石垣が確認されない時期である。構築当初の土居側堀岸は、基盤となる粘土層を掘り抜いた素掘りとなっており、本来、堀内側に沿う形状で土居が築かれていたと考えられる。第6図T-T'断面と第7図b-b'断面で削平された土居盛土基部を検出しているが、検出できた幅は約2.2mで調査区外へ続いている。C3区SA201は現在までの地籍境とも重なる位置にあり、何らかの境界を示す石列と考えられ、SK203西端付近で確認したⅠ期堀岸からは約5mの位置となる。構築当初の堀幅（道路際までの推定幅）は、北堀で約5m、西堀で約11mとなる。寛文7年以降の城下絵図では外道の描写があるが、堀堆積土の状況からとくに北堀側の道幅は現在よりも狭かったと考えられる。防衛上、堀外側に巡る道が構築当初にはなかったと仮定して道路幅までを堀跡とすると、推定される堀幅は北堀で約11m、西堀は約15mとなる。Ⅱ期の17世紀中頃にかけては、升形内部のC4区にSK404が掘削され、早い段階から宅地化が始まったと考えられる。現存最古の城下絵図である寛文七年金沢図（1667年・石川県立図書館蔵）では既に升形内に町屋の記載を見いだすことが出来る。

第Ⅳ期（17世紀末～18世紀初め）初めから、石垣の構築を伴いながら西堀の一部を埋め立て、宅地化を始めた。宮腰往還の宮腰側から見て升形前面にあたる西堀の升形橋に近い部分において、SA203を西面としSA211を北面とする石垣を築き、突堤状の埋め立てを行った。これにより、西堀は約5m堀幅が狭まった。埋め立て地には礎石建物（東西2.85m×南北4.2m以上）を建てている。升形隅部から北堀側にかけては、土砂により徐々に堀幅が狭まったものの依然素掘りの土坡だったと考えられる。

第Ⅴ期（18世紀前半）初めには、第Ⅳ期埋め立ての際に築いたSA211の北約4mの位置にSA210を築き、SA203を北に延長して東へクランクさせSA204を築いた。SA210が北堀東側の土坡延長上に築かれ

たことで升形北西隅角部が石垣となった。

第Ⅵ期（18世紀中頃～19世紀中頃）初めにはSA210の北側にSA209とSA222を築き、北堀幅をさらに約2.9m狭くした。また、SA204北端部をSA209との交点まで延長し、隅角部に算木積みの隅石を設けた。北堀東側には依然石垣は築かれぬが、埋め立てによる土坡裾部にはジグザグもしくは二本ずつ並べて打ち込んだ杭の間に横板を立て土留め（関板）としている。第7図b-b'断面をみると土居側堀岸がほぼ垂直なため、土留め板は堀底から約1m以上の高さまで設けられていたと推測される。

第Ⅶ期（明治時代以降）初めには西堀・北堀とも大規模に埋め立てられた。埋め立ての際、西堀石垣の升形角部から北に新たにSA208を築き、また、SA203・SA205・SA204・SA208に対面してSA206・SA207を新たに築きその間を幅約0.5mの溝SD201と幅約0.7mのSD202とし、新たに築いた石垣背面の堀を全面的に埋めた。この溝は北側の道路下へと抜けており、調査区内の北堀は完全に埋め立てられた。西堀の埋土（第3層）下層からは「萬延年製」裏銘の瀬戸産染付碗が出土している。万延年間は元年（1860）のみである。また、堀埋め土の第3層下層出土遺物は幕末期の様相を示し、印判手の染付磁器が出土しないことから、埋め立ては明治時代初年ごろと考えられる。明治2～3年頃に惣構土居の取り壊しや堀の埋め立てが市内で行われており、升形の堀埋め立ても同時期に位置づけられよう。

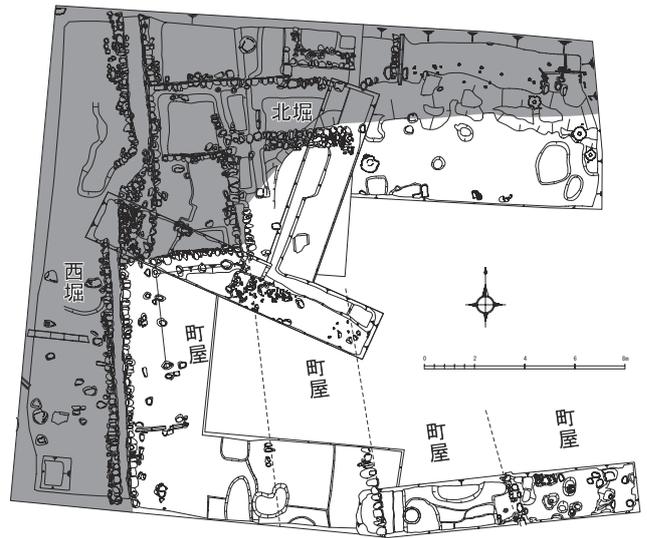
第Ⅰ期の堀深度は、西堀南端部で掘削したサブトレンチ部において升形内部の第Ⅱ期生活面までの比高差で約3mである。以降の堀深度の変遷は、西堀石垣の下端変化から知ることが出来、第Ⅳ期が約1.5m、第Ⅴ期が約1m、第Ⅵ期が約90cm。第Ⅶ期の溝SD201・SD202の深さは約65cmである。

第Ⅳ期以降の埋立地上に建てられた礎石建物および東隣の土居跡西辺上の宅地は、文化8年（1811）『金沢惣構絵図』・文化9年「御惣構等橋番人名帳」（金沢市立玉川図書館蔵）によると、「橋番人 鶴屋孫左衛門 後家」「同 山崎屋 九兵衛」屋敷と推定される。また、後藤家文書「文禄年中以来旧記」によると、享保5年（1720）に、惣構橋番屋敷下の堀に石垣を築くよう指示があったとされる。升形地点の発掘成果からは、この指示の前から石垣を伴う堀の埋め立てが始まっていたことがうかがえる。

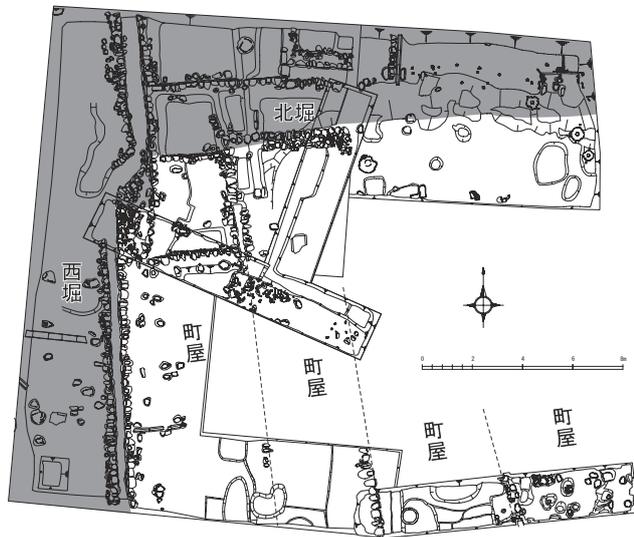
参考文献
石川県図書館協会 1976「文禄年中以来旧記」『金沢城郭史料』
金沢市史編さん委員会 2000『金沢市史』資料編6



第Ⅰ～Ⅲ期



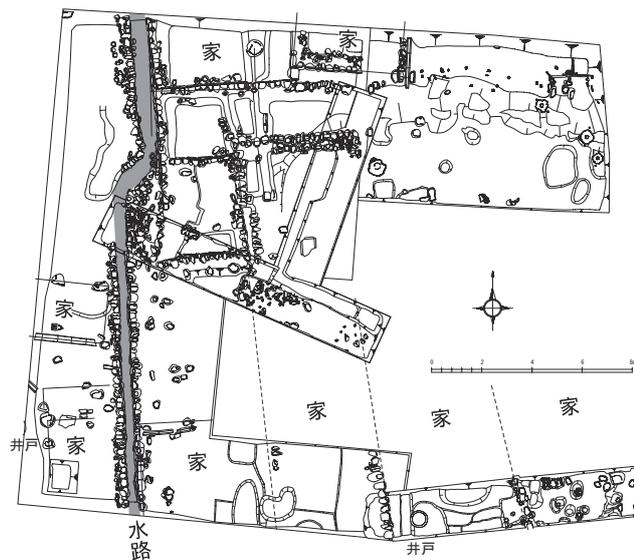
第Ⅳ期



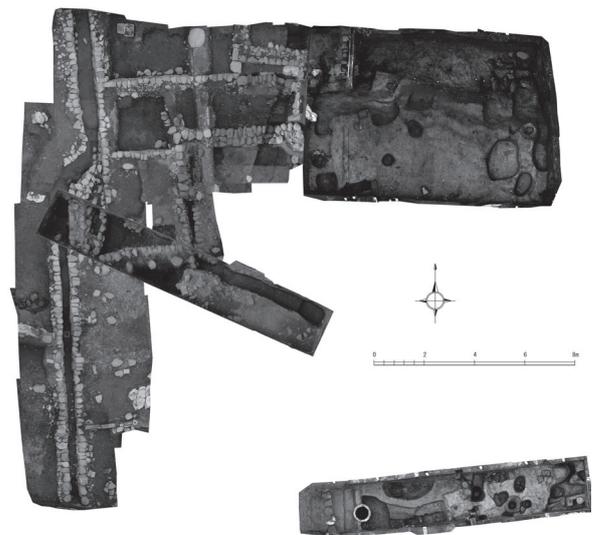
第Ⅴ期



第Ⅵ期



第Ⅶ期



俯瞰モザイク写真

第14図 西外惣構跡形地点 遺構変遷図

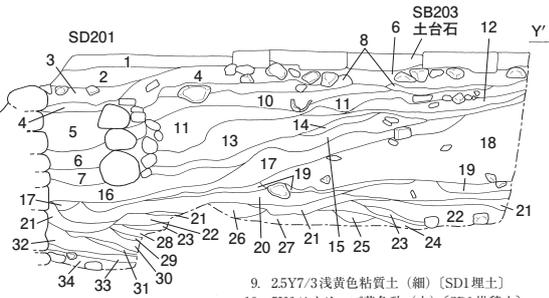
同
 大工職 春日屋 甚兵衛
 藏人橋々番人 越中屋 彦右衛門
 小間物并八百屋物商売 八百屋 伊右衛門
 同 たはこ商売 八百屋 伊右衛門
 九人橋々番人 笹塚屋 又右衛門
 古金商売 同 松任屋源左衛門後家
 同 小間物商売
 | 惣構 鈴見屋九兵衛 ホ |
 主計橋々番人 竹橋屋 宗助
 髪結職 同 若林屋 吉助
 大工職 越中井波・城端中使小下宿 塩屋 弥三郎
 同 材木町橋々番人 同 是安屋 助三郎
 同 たはこ商売并油小売 備中橋々番人 能登屋 喜三郎
 白銀細工 同 古手井打綿商売・大工職 鈴見屋 九兵衛
 同 同 荒物商売 新保屋 善右衛門
 同 八百屋商売并かせき 四十万屋大兵衛
 八坂惣構番人 福岡屋 長兵衛
 桶屋職 小立野惣構番人 井波屋 与助
 棺物屋職
 | 惣構 組合頭米屋次平 へ |
 西町橋々番人

桶屋職 桶屋 彦三郎
 同 桑山保童円葉商売 大野屋 仁右衛門
 十間町橋々番人 小間物并塩・油小売 才田屋 小兵衛
 同 紙合羽職 同 下近江町橋々番人 八百屋商売 同 荒物商売・御能作物師 袋町橋々番人 豊職并針職 袋町橋々番人 小間物并八百屋商売・ 湯風呂商売 同 小間物商売・ 森山三絨職并奉公人口入 大浦屋 理兵衛
 (二八四) 文政七年 道橋帳写 (前略)
 一、畳屋橋渡四間、幅式間、橋台石垣共
 一、同所往来橋台迄悪水樋長八間、幅式尺、溝縁関板
 一、宮内橋渡五間、幅式間、橋台石垣共
 一、同所橋台口樋壱本長壱丈、幅壱尺、同所水上往来溝橋渡式尺、幅七尺
 (中略)
 一、松平数馬横悪水樋長式間、太サ壱尺宛、式ヶ所
 一、同人居屋敷向惣構土居之内樋長六間、幅式尺
 一、前田 前橋渡四尺五寸、幅壱丈、左右石垣

座頭庄ノ小路
 一、小竹前橋渡五尺、幅七尺
 一、菊池前溝橋渡五尺、幅式間、橋台石垣
 一、惣構生洲橋渡六尺、幅七尺、橋台関板石屋之小路
 一、同所統木村弥十郎前橋六尺四方
 一、安江町舛形橋渡三間壱尺、幅式間壱尺
 一、同所橋台樋長三間、幅式尺宛式ヶ所
 一、熊坂橋式間四方、橋台石垣
 一、同所橋台悪水樋壱ヶ所長式間、太サ壱尺
 一、東末寺町出口橋渡四間、幅式間、橋台石垣
 一、同所橋台西御坊町入口迄堀縁口樋四ヶ所長式間、太サ壱尺宛
 一、東末寺後津田善助横往来惣構土居之内共悪水樋長六間、幅式尺
 (以下略)
 (金沢市史資料編6) 加越能文庫「金沢道橋帳写」
 出典史料の解説
 「文禄年中以来等之旧記」普請会所穴生方(石垣専門職)後藤彦三郎が正当な技術による石垣構築を主張して金沢城代に提出した城内絵図や秘伝書等の一。文政八年成立。「御惣構等橋番人名帳」文化八年に成立し、文化九年五月までの移動表示の付箋が貼付される『金沢町名帳』(金沢市立玉川図書館蔵)全四十冊の一。金沢城下の各町肝煎の才許区毎に番号を付けて別冊に作られ、管轄区域内の町の組合別に住人の職業・名前を記す。
 「金沢道橋帳写」文政七年成立。道橋方編。作事所の修理にかかる川溝・橋・悪水樋・坂道・石垣等の場所及び各々の幅・長さ、及び安永(八七九)文政年間(八五三)の修理記事。嘉永五年(一八五三)成立の「金沢道橋台帳」にも、作事所より道橋方へ引送りの道橋等修理場所及びその幅・長さを記す。

西堀

Y
L=10.9m



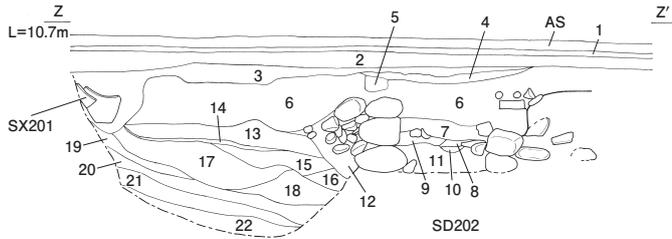
西堀 (Y-Y'断面)

1. 5Y4/1 灰色土 (中)
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (中)
3. 5Y4/2 灰オリブ色粘質土 (細)
4. 5Y5/1 灰色土 (中)
+5Y6/3 オリーブ黄色粘土 (極細) 小粒50%
5. 2.5Y6/4 におい黄色砂 (粗)
+2.5Y5/1 黄灰色砂 (中) 互層 [第3層]
6. 2.5Y5/3 黄褐色砂 (中)
+2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (細) 50%
7. 2.5Y6/4 におい黄色砂 (粗)
8. 5Y6/3 オリーブ黄色粘質土 (細)
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 (粗)
+礫 (SD201 裏込)
10. 2.5Y5/1 黄灰色砂質土 (中)
+2.5Y6/4 におい黄色粘質土 (細) 中粒60%
11. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 (中)
12. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (細)
13. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (細)
+2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (極細) 小粒10%
14. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (細)
+2.5Y7/2 灰黄色粘土 (極細) 中粒30%
15. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (細)
+2.5Y7/2 灰黄色粘土 (極細) 小粒20%
16. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (細)
17. 5Y5/2 灰オリブ色砂 (中)
+5Y7/3 浅黄色粘土 (極細) 小粒20%
18. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (細) 40%
+5Y6/2 灰オリブ色粘土 (極細)
小粒20%+2. 5Y5/2 暗灰黄色砂 (粗)
19. 7.5Y5/1 灰色粘土 (極細)
20. 5Y5/2 灰オリブ色砂 (粗)
21. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (細) +炭小粒5%
22. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂 (粗)
23. 5Y4/1 灰色粘質土 (細)
24. 5Y5/2 灰オリブ色砂 (中)
25. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂 (粗)
26. 5Y6/2 灰オリブ色砂 (中)
27. 2.5Y5/4 黄褐色砂 (粗)
28. 2.5Y5/6 黄褐色砂 (粗)
29. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (細)
30. 5Y5/3 灰オリブ色砂 (中)
31. 2.5Y5/1 黄灰色粘土 (極細)
32. 2.5Y5/4 黄褐色砂 (粗)
33. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (極細) +炭小粒5%
34. 5Y5/2 灰オリブ色砂 (中)

西堀北壁 (Z-Z' 断面)

1. 礫
2. アスファルト
3. 5Y4/1 灰色粘質土 (細) +2.5Y8/3 淡黄色粘土 (極細) 小粒30%
4. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (中) [SD1埋土]
5. 2~3cm礫
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 (中) +2.5Y7/3 浅黄色粘土 (極細) 中粒40%
7. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (中) [SD1埋土]
8. 2.5Y6/4 におい黄色砂 (中) [SD1埋土]

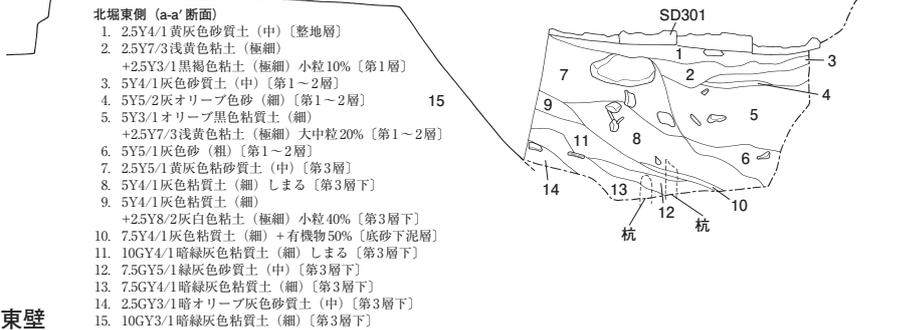
西堀北壁



9. 2.5Y7/3 浅黄色粘質土 (細) [SD1埋土]
10. 5Y6/4 オリーブ黄色砂 (中) [SD1堆積土]
11. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (細) [SD1堆積土]
12. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (細) [裏込]
13. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (細)
+2.5Y6/1 黄灰色粘土 (極細)
大粒70% しまる [裏込]
14. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (極細) +炭中粒10%
15. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (細)
+2.5Y6/1 黄灰色粘土 (極細)
大粒20% ややまろい [第2~3層]
16. 5GY4/1 暗オリブ灰色粘質土 (細)
[第2~3層]
17. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (極細)
+2.5Y8/2 灰白色粘土 (極細)
大粒50% [第2~3層]
18. 5GY4/1 暗オリブ灰色粘土 (極細)
+10GY7/1 明緑灰色粘土 (極細)
大粒80% [第2~3層]
19. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (細) [第2~3層]
20. 5Y5/1 灰色砂 (粗) [第4層]
21. 5Y4/1 灰色粘質土 (細) [第4層]
22. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂 (粗) [第4層]

北堀東側

a
L=11.0m

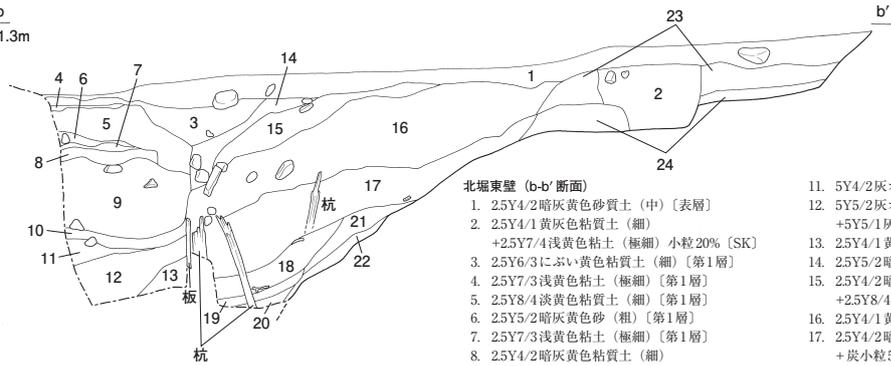


北堀東側 (a-a'断面)

1. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (中) [整地層]
2. 2.5Y7/3 浅黄色粘土 (極細) 小粒10% [第1層]
+2.5Y3/1 黒褐色粘土 (極細) 小粒10% [第1層]
3. 5Y4/1 灰色砂質土 (中) [第1~2層]
4. 5Y5/2 灰オリブ色砂 (細) [第1~2層]
5. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (細)
+2.5Y7/3 浅黄色粘土 (極細) 大粒20% [第1~2層]
6. 5Y5/1 灰色砂 (粗) [第1~2層]
7. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (中) [第3層]
8. 5Y4/1 灰色粘質土 (細) しまる [第3層下]
9. 5Y4/1 灰色粘質土 (細)
+2.5Y8/2 灰白色粘土 (極細) 小粒40% [第3層下]
10. 7.5Y4/1 灰色粘質土 (細) +有機物50% [底砂下泥層]
11. 10GY4/1 暗緑灰色粘質土 (細) しまる [第3層下]
12. 7.5GY5/1 緑灰色砂質土 (中) [第3層下]
13. 7.5GY4/1 暗緑灰色粘質土 (細) [第3層下]
14. 2.5GY3/1 暗オリブ灰色砂質土 (中) [第3層下]
15. 10GY3/1 暗緑灰色粘質土 (細) [第3層下]

北堀東壁

b
L=11.3m



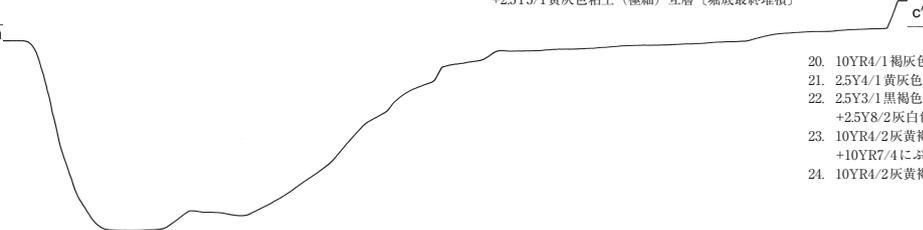
北堀東壁 (b-b'断面)

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 (中) [表層]
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (細)
+2.5Y7/4 浅黄色粘土 (極細) 小粒20% [SK]
3. 2.5Y6/3 におい黄色粘質土 (細) [第1層]
4. 2.5Y7/3 浅黄色粘土 (極細) [第1層]
5. 2.5Y8/4 淡黄色粘質土 (細) [第1層]
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂 (粗) [第1層]
7. 2.5Y7/3 浅黄色粘土 (極細) [第1層]
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (細)
+2.5Y7/4 浅黄色粘土 (極細) 小粒50% [第1層]
9. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (極細)
+2.5Y7/3 浅黄色粘土 (極細) 中大粒20% [第2層]
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂 (粗~細)
+2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (極細) 互層 [堀底最終堆積]

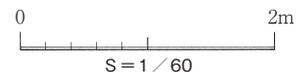
11. 5Y4/2 灰オリブ色砂 (粗) [堀底砂上層最上層]
12. 5Y5/2 灰オリブ色砂 (中)
+5Y5/1 灰色粘土 (極細) 互層 [堀底砂上層最上層]
13. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (細) [堀底砂上層最上層]
14. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 (中) -岸の流れ込み堆積 [第3層]
15. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (細)
+2.5Y8/4 淡黄色粘土 (極細) 中大粒20% -岸・表土 [第3層]
16. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (中) +炭小粒5% [第3層]
17. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (中)
+炭小粒5% ややしまる [第3層]
18. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土 (中)
+中小礫50% 陶磁器多い旧岸の流れ込み堆積 [第3層下層]
19. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂 (中) [3期堀底堆積]

北堀

c
L=11.0m



20. 10YR4/1 褐色粘質土 (細) [3期堀底堆積]
21. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (細) +炭小粒5% [層部堆積]
22. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (細)
+2.5Y8/2 灰白色粘土 (極細) 50% [層部堆積]
23. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (細)
+10YR7/4 におい黄褐色粘土 (極細) 小粒50% [土居盛土]
24. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (細) [土居盛土]



第7図 西堀・北堀東側土層

報告書抄録

ふりがな	いしかわけんかなざわし かなざわじょうそうがまえあと 4							
書名	石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅳ							
副書名	金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）発掘調査報告書							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	276							
編集者名	庄田知充・谷口宗治							
編集機関	金沢市埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-0374 金沢市上安原南60番地							
発行年月日	西暦2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
かなざわじょうかまち 金沢城下町 いせきにしそと 遺跡（西外 そうがまえあと 惣構跡 ますがたちてん 升形地点）	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 ほんまち 本町 1丁目	172014		36° 34' 24"	136° 39' 56"	2008.7.1～8.12 2008.12.12～16 2009.3.4～12	67㎡	学術調査 復元整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
金沢城下町 遺跡（西外 惣構跡 升形地点）	城下町 惣構	江戸時代	堀、堀石積 建物、土坑	中国磁器、国産陶磁器、石製 品、金属製品、木製品、瓦		堀跡、升形内の建物跡 を検出		
要 約								
<p>金沢城惣構は、城防備のため慶長期に築造された土居と堀を中心とした防御施設である。金沢には東西それぞれ内外二重の惣構があり、城を囲む4筋の防御線となっている。西外惣構は、金沢城南東方向の小立野台地裾部を起点とし、城の南側を東流して香林坊で北国街道と交差し、北上して升形に至り、本願寺金沢東別院南東角から北西に折れ、西流して浅野川に至る。升形は、惣構が街道と交差する交通・軍事上の要衝に設けられた防御施設で、敵の侵入を防ぐために堀と土居を曲げてその内部に四角い空間をつくっている。本報告の調査地は、金沢城下に現存する唯一の升形遺構である。</p> <p>発掘調査は、平成20～22年度にかけて3次にわたって実施した。第1次調査（平成20年度）では、升形遺構の残存状況、第2次調査（平成21年度）では、升形遺構の範囲・規模・変遷過程、第3次調査（平成22年度）では、升形下流部の堀の構造と升形内部空間の状況が明らかになった。</p> <p>本調査により、惣構の代表的な防御地点である升形の構造の実態や、升形における惣構の堀の変遷・土地利用の変容が明らかになった。</p>								

石川県金沢市

金沢城 惣構跡Ⅳ

（『金沢市文化財紀要276』）

平成24年（2012）3月30日発行

発行 金 沢 市

編集 金沢市埋蔵文化財センター

〒920-0374

石川県金沢市上安原南60番

電話 (076) 269-2451

印刷 株式会社栄光プリント



西外惣構跡升形地点全景 西から



升形角部 (SA204・SA209・SA210・SA211) 北西から



SD201・SD202 北から



SA202・SA203 南西から



西堀SA203 南から



SA209・SA210・SA211 北西から



SA209・SA210・SA204・SA205 北から



SA208・SA204 西から



升形角部 北から



西堀F-F'断面西側・堀底サブトレンチ 北西から



SD202 Z-Z'断面 南から



北堀V-V'断面 西から



西堀F-F'断面東側 北から



北堀W-W'断面 西から



西堀Y-Y'断面 北から



北堀T-T'断面 東から



SB202 北西から



SA211・SB201 北から



SB203～205 南から



SA217・SA215 T-T'断面 東から



SB203-3 墨書のある石 南から



SA201・SD205 南から



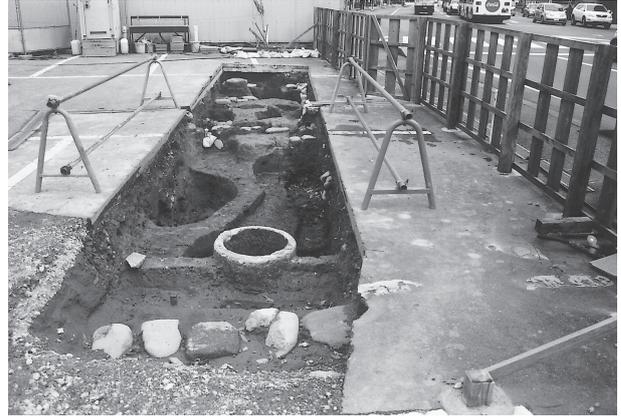
SD203 北から



SD204 南から



SA203・SA221から東方向



SA201・SE401から東方向



SB401 東から



SK404から西方向



SP402・SP404～406 南から



埋ガメ2～4 北東から



北堀東側 西から



北堀東側周辺 西から



北堀東側 北西から



北堀東側 a-a'断面 東から



北堀東側 b-b'断面土留め杭 西から



北堀東側土留め杭と関板 西から